川口乙遺跡発掘調査報告書

2003

新津市教育委員会

例　　言

1．本書は新潟県新津市大字川口字乙に所在する川口乙（かわぐちおつ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は川口土地区画整理事業に伴い、川口土地区画整理組合の委託を受けて新津市教育委員会が事業主体となり発掘調査を実施した。

3．平成13年度に発掘調査を平成14年度に報告書作成に係る整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。

4．出土遺物・調査記録は新津市教育委員会が一括して保管している。

5．本書の編集は高野裕子（新津市教育委員会嘱託）が行った。執筆は第Ⅰ章を渡邊朋和（新津市教育委員会）、第Ⅱ章を『中谷内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(2002) から引用・一部改変し、その他を高野が行った。

6．本書で用いた写真は、遺跡写真は渡邊、遺物写真は高野・佐野博子（新津市教育委員会嘱託）が撮影したものである。ただし、写真図版１は国土地理院が撮影したもの、航空写真は測量業者が撮影したものを使用した。

7．図版１は新津郷土地改良区所蔵「中蒲原郡新津郷耕地整理組合現形図」（１／1800）を縮小し、「新津市都市計画図」（１／10000）と重ねあわせたものである。

8．本書で示す方位は全て真北である。

9．調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼を申し上げる。(所属・敬称略、五十音順)

伊藤秀和・春日真実・北村　亮・水澤幸一

新潟県教育庁文化行政課・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団・新津郷土地改良区・樋口鉄工建設株式会社

凡　　例

1．本書は本文・別表と巻末図版（図版・写真図版）からなる。

2．本書の注は各章の末尾に記した。引用文献は著者と発行年を〔　〕文中に示し、巻末に一括して掲載した。

3．遺構番号は現場で付したものを用いた。番号は遺構の種別毎に付さず、通し番号とした。

4．土層の土色観察は『新版　標準土色帖』〔農林水産技術会議事務局1967〕を用いた。

5．土器実測図の断面表現は種別で区別した。黒塗りは須恵器で、それ以外は白抜きである。土師器及び酸化炎焼成の須恵器はセピア色で示した。これは新津市内の古代遺跡からは一定量の酸化炎焼成の須恵器が出土し、それらのほとんどが新津丘陵で生産された須恵器であると推測され、それらを図面上で区別する必要があると考えたためである。

6．遺物実測図で全周の１／12以下のような遺存率の低いものについては中軸線の両側に空白を作って区別した。

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
1　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
2　周辺の遺跡 …… 2
3　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 9
1　試掘・確認調査 …… 9
2　発掘調査 …… 9
A　調査方法 …… 9
1）現　　況 …… 9
2）グリッドの設定 …… 11
3）調査方法 …… 11
B　調査経過 …… 11
C　調査体制 …… 11
3　整理作業 …… 12
A　整理方法 …… 12
1）遺　　物 …… 12
2）遺　　構 …… 12
B　整理経過 …… 12
C　調査体制 …… 12

第Ⅳ章　遺　　跡 …… 14
1　概　　要 …… 14
2　層　　序 …… 14
3　遺構各説 …… 15
A　古代の遺構 …… 15
1）土坑（SK） …… 15

第Ⅴ章　遺　　物 …… 17
1　平安時代の遺物 …… 17
A　土器の分類と記述 …… 17
1）用語説明 …… 17
2）分　　類 …… 17
B　出土遺物各説 …… 19

1）遺構出土遺物 …… 19
2）包含層出土遺物 …… 20
3）試掘・確認調査 …… 20

第Ⅵ章　ま　と　め …… 21
1　遺　　構 …… 21
2　遺　　物 …… 21
A　年　　代 …… 21
B　折縁杯について …… 21

引用・参考文献 …… 23

別　表
1　主要遺構一覧表 …… 25
2　遺物観察表 …… 26

報告書抄録

挿図目次

第1図　新津丘陵周辺地形分類図（1 / 150,000） …… 3
第2図　新津市周辺の古代遺跡分布図（1 / 100,000） …… 5
第3図　川口乙遺跡試掘・確認調査位置図（1 / 4,000） …… 9
第4図　川口乙遺跡試掘・確認調査土層柱状図（1 / 40） …… 10
第5図　川口乙遺跡土器分類図（1 / 4） …… 18
第6図　蒲原郡出土の折縁杯（1 / 4） …… 22

表目次

第1表　新津市周辺の古代遺跡一覧表 …… 4

図版目次

図版1　遺跡周辺の旧地割図（1 / 10,000）
図版2　川口乙遺跡と周辺の遺跡（1 / 10,000）
図版3　川口乙遺跡調査区とグリッド設定図（1 / 2,500）
図版4　川口乙遺跡グリッド設定図（1 / 400）
図版5　川口乙遺跡遺構平面図（1 / 200）
図版6　川口乙遺跡基本土層図（1 / 40）

図版７　ＳＫ６・７・８・12・13・27実測図（１/40）
図版８　ＳＫ16・32・33実測図（１/40）
図版９　出土遺物１　ＳＫ８・10・16
図版10　出土遺物２　ＳＫ16・33
図版11　出土遺物３　ＳＫ27・32・33
図版12　出土遺物４　包含層
図版13　出土遺物５　包含層、石製品、試掘・確認調査出土遺物

写真図版目次

写真図版１　川口乙遺跡周辺空中写真（国土地理院1948年３月撮影）
写真図版２　川口乙遺跡周辺空中写真
写真図版３　空中写真
写真図版４　空中写真、遺跡全景
写真図版５　調査区南側、ＳＫ16・32・33
写真図版６　基本層序、ＳＫ16・33
写真図版７　調査前近景
写真図版８　空中写真
写真図版９　基本層序
写真図版10　基本層序
写真図版11　遺跡全景、空中写真
写真図版12　ＳＫ16・32・33
写真図版13　ＳＫ16・33
写真図版14　ＳＫ６・８・12・13
写真図版15　ＳＫ７・27・32
写真図版16　出土遺物ＳＫ８・16・32・33、包含層
写真図版17　出土遺物ＳＫ８・10・16
写真図版18　出土遺物ＳＫ33
写真図版19　出土遺物ＳＫ27・32・33
写真図版20　出土遺物包含層
写真図版21　出土遺物包含層、試掘・確認調査出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

平成７年、新津市川口字乙・上浦で計画された土地区画整理事業について新津市（以下市とする）都市整備課から市生涯学習課に埋蔵文化財についての事前協議があった。生涯学習課では上浦遺跡や川口甲遺跡に隣接し、北潟の自然堤防上に立地すること、開発予定面積が72,956㎡と広いことから未周知の遺跡の存在する可能性が高く、事前に試掘調査が必要である旨回答した。

同10月31日、仮称川口土地区画整理組合設立準備委員（組合設立前のため）から教育長宛に試掘調査の依頼があり、11月27日～12月１日の実質５日間、試掘調査を実施した。調査面積は306㎡（２ｍ×３ｍ×51トレンチ）である。調査の結果３か所のトレンチで須恵器・土師器・椀形滓が検出され、遺物包含層は暗青灰色粘土層、遺構確認面（地山）は青灰色粘土・シルト層であることが判明した。遺跡の所属時期は須恵器無台杯の形態から９世紀後半と推測された。遺跡が発見されたものの、中心部分に土砂置き場などで試掘調査が実施できなかった部分があり、遺跡推定範囲を確定することができなかったために、後日追加確認調査を実施することとした。

平成８年４月15日に土砂置き場を中心として７か所のトレンチ（52～58Ｔ）を設定し、追加確認調査を実施した。調査面積は平成７年度の試掘調査と合わせて348㎡である（確認調査の詳細は第Ⅲ章に記載）。４月25日付教生第138号で新潟県（以下県とする）文化行政課長宛に発掘調査の終了報告を提出するとともに、小字名をとって「川口乙遺跡」として新遺跡発見の手続きを行った。

平成11年12月７日には工事計画と確認調査結果により協議を行い、遺跡推定範囲内で新規に道路を造成する部分約1,200㎡について本調査を実施すること、調査経費は組合が負担することで合意した。発掘調査実施年度は平成13年度、整理作業は翌年度に実施することとなった。

平成12年11月１日付けで組合から文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく届出が組合理事長から県教育長宛提出された。これを受けて11月15日付教文800号で発掘調査を実施するように指示が県教育長から組合理事長宛通知された。

新津市は平成13年４月24日に協定書と契約書を取り交わし、教育委員会は５月22日付教生第152号で文化財保護法第58条の２第１項の規定に基づく発掘調査の報告を県教育長宛提出して発掘調査に着手した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1・2）

新津市は越後平野のほぼ中央に位置し、新津丘陵を中心として東に阿賀野川、西に信濃川が北流する。新津市域の地形は丘陵とその縁辺の段丘、沖積地から成っている。南南西－北北東に走る新津丘陵は加茂川を南限に標高278mの高立山が最も高く、北に行くに従い標高を下げて北端では70～80mとなり、その周囲に段丘が標高70～10m間に4段見られる〔鈴木1989〕。沖積地は信濃川・阿賀野川の二大河川により形成され、自然堤防や旧河道・後背湿地・三角州などの地形が見られる。阿賀野川が流路を東遷させてきた結果、新津市域では新津丘陵北端～小阿賀野川間に自然堤防が形成され、現在起伏の極少ない微高地として断続的に存在している。

加治川が阿賀野川に、阿賀野川が新潟港で信濃川に合流していたため、平野部は度々水害に見舞われていた。そこで享保15年（1730）新発田藩が松ヶ崎放水路を開削し、現在の阿賀野川の河口となった。阿賀野川には五泉市域を北流してきた早出川が下新付近で合流しており、七日町付近では阿賀野川から分岐した小阿賀野川が西流し覚路津付近で信濃川に合流する。新津丘陵東縁を北流する能代川は太平洋戦争後に水害対策の河川改修が行われた。これにより村松町千原～新津市大関間の蛇行部分が直線化され、新津市街地を貫流していた本来の流路から東方に分流が作られ、現在新津川・能代川となっている。能代川と新津川は下興野付近で再び合流し、荻島付近で小阿賀野川に注いでいる。

遺跡は能代川の形成した起伏の小さい自然堤防左岸から西へ延びた自然堤防北端に位置している。

現在の遺跡周辺は一面の水田地帯だが、これらの大半は昭和23年頃の耕地整理によって形成されたものである。

昭和15年頃の「中蒲原郡新津郷耕地整理組合現形図」（新津郷土地改良区所蔵）によると、それ以前においては遺跡周辺の南側には集落・畑地が拡がり、北側には水田が拡がっていた。

遺跡は現在の北潟集落の北に位置しており、遺跡の中心は今回の調査区よりも南側にあり、集落と重なるものと予測される。

2　周辺の遺跡（第2図、第1表、図版2）

時代別の遺跡の分布は旧石器・縄文・弥生時代では丘陵・段丘上に集中し、古墳時代には丘陵や段丘の縁辺部や平野部微高地、奈良・平安時代になるとさらに平野部微高地に分布が見られるようになる。具体的には古代までは丘陵上に弥生後期の環濠集落・円墳などが展開し、丘陵裾部には奈良・平安時代の製鉄・須恵器（土師器）窯などの生産遺跡が集中している。

旧石器時代の遺跡　当該期の遺跡は、ローム層を上部に含む矢代田層・蒲ヶ沢層により形成された新津丘陵周辺に分布する。八幡山遺跡第3次調査〔川上1994〕や草水町2丁目窯跡でナイフ形石器・石刃などが散発的に出土している。

縄文時代の遺跡　採集資料によると市内で20遺跡が確認されている。時期としては中期～後期が主体で、標高10～30mの丘陵上・段丘上に立地するものが多い。代表的な遺跡としては、原遺跡が市内最大規模の縄

新潟県『土地分類基本調査　新潟・新津』1972・1974年より作成（1/150,000）

第１図　新津丘陵周辺地形分類図

第１表　新津市周辺の古代遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	新潟市　中山	縄文・古墳・奈良・平安	遺物散布地	70	豊栄市　城の潟	平安	遺物包含地	139	新津市　大下	平安	遺物包含地
2	新潟市　笹山前	縄文・弥生・奈良・平安	遺物散布地	71	豊栄市　浦木	平安	遺物包含地	140	新津市　無頭	平安	遺物包含地
3	新潟市　茗荷谷	奈良・平安	遺物包含地	72	豊栄市　縄内	平安	遺物包含地	141	新津市　結七島	奈良・平安	遺物包含地
4	新潟市　彦七山	奈良・平安	遺物包含地	73	豊栄市　里飯野	平安	遺物包含地	142	新津市　西島中谷内	奈良・平安	遺物包含地
5	新潟市　金塚山	縄文・奈良・平安	遺物包含地	74	豊栄市　岡新田	平安	遺物包含地	143	新津市　久保	平安	遺物包含地
6	新潟市　前山	奈良・平安	遺物包含地	75	豊栄市　大夫曽根	平安	遺物包含地	144	水原町　三辺稲荷	平安	遺物包含地
7	新潟市　丸山	平安	遺物包含地	76	豊栄市　上堀田	平安	遺物包含地	145	小須戸町　東腰村	平安	遺物包含地
8	新潟市　直り山A	平安	遺物散布地	77	豊栄市　村下	奈良～平安	遺物包含地	146	小須戸町　大沢谷内	平安	遺物包含地
9	新潟市　神明社裏	平安	遺物散布地	78	豊栄市　内沼浦	奈良～平安	遺物包含地	147	小須戸町　六兵衛沢	平安	窯跡
10	新潟市　城山	古墳・平安・鎌倉	遺物包含地	79	豊栄市　川東	奈良～平安	遺物包含地	148	小須戸町　横川浜堤外地	縄文・平安	遺物包含地
11	新潟市　北山	平安	遺物包含地	80	豊栄市　中道	奈良～平安	遺物包含地	149	小須戸町　三沢B	平安	遺物包含地
12	新潟市　直り山B	平安	遺物包含地	81	豊栄市　中道 (2)	奈良～平安	遺物包含地	150	五泉市　住吉田	奈良	遺物包含地
13	新潟市　小丸山	縄文・平安・中世	集落	82	豊栄市　神田	奈良～平安	遺物包含地	151	五泉市　山崎窯跡	奈良	窯跡
14	新潟市　茗荷谷墓地	平安	遺物包含地	83	豊栄市　神田 (2)	奈良～平安	遺物包含地	152	五泉市　小実山	縄文・弥生・古代	遺物包含地
15	新潟市　清水が丘	平安	遺物包含地	84	豊栄市　桜曽根	奈良～平安	遺物包含地	153	五泉市　丸田	平安	遺物包含地
16	新潟市　大道外	平安・中世	遺物包含地	85	豊栄市　並柳	奈良～平安	遺物包含地	154	五泉市　橋田A	奈良	遺物包含地
17	新潟市　女池稼荷	平安	遺物包含地	86	豊栄市　桜曽根2	奈良～平安	遺物包含地	155	五泉市　橋田B	奈良・平安	遺物包含地
18	新潟市　松山向山	平安	遺物包含地	87	豊栄市　池田	奈良～平安	遺物包含地	156	五泉市　橋田C	古代	遺物包含地
19	亀田町　城山A	縄文・弥生・奈良～平安	遺物包含地	88	豊栄市　池田2	奈良～平安	遺物包含地	157	五泉市　町屋六条	古代・中世	遺物包含地
20	亀田町　砂崩	縄文・奈良～平安	遺物包含地	89	京ヶ瀬村　曽根	平安	遺物包含地	158	五泉市　新保	奈良・平安・江戸	遺物包含地
21	亀田町　迎山	縄文・奈良～室町	遺物包含地	90	京ヶ瀬村　本田裏	平安	遺物包含地	159	五泉市　江中	古代	遺物包含地
22	亀田町　日水南	縄文・奈良～室町	遺物包含地	91	京ヶ瀬村　城館	平安	城館跡	160	五泉市　中野	奈良・平安	遺物包含地
23	亀田町　西前郷	縄文・奈良～平安	遺物包含地	92	京ヶ瀬村　干刈	平安	遺物包含地	161	五泉市　筧下	奈良・平安	遺物包含地
24	亀田町　斉助山	縄文・弥生・奈良～平安	遺物包含地	93	京ヶ瀬村　善四郎谷地	平安	遺物包含地	162	五泉市　村付	奈良・平安	遺物包含地
25	亀田町　武左衛門裏	古墳・平安	遺物包含地	94	新津市　舟戸	古墳・古代・中世	集落跡	163	五泉市　板表	奈良・平安・中世	遺物包含地
26	亀田町　貝塚	奈良・平安	遺物包含地	95	新津市　大坪	奈良～平安	遺物包含地	164	五泉市　道金	奈良・平安	遺物包含地
27	亀田町　三条岡	奈良・平安	遺物包含地	96	新津市　塩辛	奈良～平安	遺物包含地	165	五泉市　福島	奈良・平安・中世	遺物包含地
28	亀田町　上ノ山	奈良・平安	遺物包含地	97	新津市　七本松窯跡群	平安	窯跡	166	五泉市　ソブタ	奈良・平安	遺物包含地
29	亀田町　中ノ山	奈良・平安	遺物包含地	98	新津市　寺鳴	平安・鎌倉	遺物包含地	167	五泉市　石ノ子	奈良・平安	遺物包含地
30	亀田町　狐山	奈良・平安	遺物包含地	99	新津市　曽根	平安・鎌倉	遺物包含地	168	五泉市　段ノ腰	奈良・平安	遺物包含地
31	亀田町　上沼	奈良・平安	遺物包含地	100	新津市　下梅ノ木	平安・鎌倉・室町	遺物包含地	169	田上町　ガンゴウ寺	平安	遺物包含地
32	亀田町　茨島	奈良・平安	遺物包含地	101	新津市　川根	平安・鎌倉・室町	遺物包含地	170	田上町　二段あげ	平安	遺物包含地
33	亀田町　砂岡	奈良・平安	遺物包含地	102	新津市　小戸下組	平安・鎌倉・室町	遺物包含地	171	田上町　中鶴	平安	遺物包含地
34	亀田町　塚ノ山	奈良・平安	遺物包含地	103	新津市　結	奈良	遺物包含地	172	田上町　諏訪の前	平安	遺物包含地
35	亀田町　岡田	奈良・平安	遺物包含地	104	新津市　居村A	平安	製鉄跡	173	田上町　下屋敷跡	平安	遺物包含地
36	亀田町　牛道	平安	遺物包含地	105	新津市　沖ノ羽	奈良～平安	遺物包含地	174	田上町　羽生田城跡	平安	城館跡
37	亀田町　川西	平安・鎌倉	遺物包含地	106	新津市　西江浦	平安	遺物包含地	175	田上町　嶽吐	縄文・平安・中世	遺物包含地
38	亀田町　市助裏	平安・鎌倉	遺物包含地	107	新津市　寺道上	平安	遺物包含地	176	田上町　三波	縄文・平安	遺物包含地
39	亀田町　鵜ノ子	平安	遺物包含地	108	新津市　上浦	平安	集落跡	177	田上町　土居下	古墳・平安	遺物包含地
40	亀田町　泥潟	平安	遺物包含地	109	新津市　長沼	奈良～平安	遺物包含地	178	田上町　館外	平安	遺物包含地
41	亀田町　浦ノ山	平安	遺物包含地	110	新津市　西沼	平安	遺物包含地	179	田上町　新川	縄文・平安	遺物包含地
42	亀田町　八幡前	平安	遺物包含地	111	新津市　長左エ門沼	平安	遺物包含地	180	田上町　館内	奈良～平安	遺物包含地
43	亀田町　早通前	平安・鎌倉	遺物包含地	112	新津市　城見山	縄文 (古代・中世を含む)	遺物包含地	181	田上町　中谷内	奈良～平安	遺物包含地
44	亀田町　前郷	縄文・平安・江戸	遺物包含地	113	新津市　中郷	平安	遺物包含地	182	田上町　上谷内	奈良～平安	遺物包含地
45	亀田町　曙	平安	遺物包含地	114	新津市　桜大門	平安	遺物包含地	183	田上町　半ノ木	奈良～平安	遺物包含地
46	横越町　小丸山	縄文・弥生・奈良～平安	遺物包含地	115	新津市　北郷	奈良～平安	遺物包含地	184	田上町　竹ノ花	奈良～平安	遺物包含地
47	横越町　上田	縄文・奈良～平安	遺物包含地	116	新津市　八幡山	弥生・古墳・平安	遺物包含地	185	田上町　八反田	奈良～平安	遺物包含地
48	横越町　前郷	縄文・弥生・奈良～平安	遺物包含地	117	新津市　古津初越A	奈良・平安	製鉄跡	186	田上町　羽生田中谷内	奈良～平安	遺物包含地
49	横越町　山ン家	弥生・奈良～平安	遺物包含地	118	新津市　大入	平安	製鉄跡	187	田上町　向田	奈良～平安	遺物包含地
50	横越町　居浦郷	奈良～平安	遺物包含地	119	新津市　居村C	平安 (縄文・弥生後期を含む)	製鉄跡	188	田上町　古江端	奈良～平安	遺物包含地
51	横越町　駒込墓所	奈良～平安	遺物包含地	120	新津市　居村B	平安	製鉄跡	189	田上町　村浦	奈良～平安	遺物包含地
52	横越町　川根谷内	奈良～平安	遺物包含地	121	新津市　神田	奈良・平安 (縄文を含む)	遺物包含地	190	田上町　吉田上谷内	奈良～平安	遺物包含地
53	横越町　宮尻郷	奈良～平安	遺物包含地	122	新津市　古津初越B	奈良～平安	製鉄跡	191	田上町　小清水沢	奈良～平安	遺物包含地
54	横越町　下郷	平安	遺物包含地	123	新津市　金津初越A	奈良～平安	製鉄跡	192	田上町　横手下	奈良～平安	遺物包含地
55	横越町　山のハサバ	奈良～平安	遺物包含地	124	新津市　秋葉ブドウ園	縄文 (中期) (古代を含む)	遺物包含地	193	田上町　大坪	奈良～平安	遺物包含地
56	横越町　藤山	平安・鎌倉	遺物包含地	125	新津市　木津橋	平安	遺物包含地	194	田上町　保明浦	縄文・奈良～平安・近世	遺物包含地
57	横越町　江尻	平安	遺物包含地	126	新津市　滝谷窯跡	平安	窯跡	195	田上町　川成	奈良・平安	遺物包含地
58	横越町　居附A	平安～室町	遺物包含地	127	新津市　草水町2丁目	平安	窯跡	196	村松町　中名坂	平安	遺物包含地
59	横越町　平山	平安	遺物包含地	128	新津市　山谷北	古代	遺物包含地	197	村松町　笹野町 (A)	平安	遺物包含地
60	横越町　上の山	弥生・平安	遺物包含地	129	新津市　浦興野	古代	遺物包含地	198	村松町　笹野町 (B)	平安	遺物包含地
61	横越町　松韻寺	平安	遺物包含地	130	新津市　細池	平安	遺物包含地	199	村松町　千原	平安	遺物包含地
62	横越町　曽我墓所	平安	遺物包含地	131	新津市　川口甲	平安	遺物包含地	200	村松町　一本杉	平安・中世	遺物包含地
63	横越町　川根谷内墓所	平安・室町	遺物包含地	132	新津市　江内	平安・中世・近世	遺物包含地	201	村松町　城下	平安	遺物包含地
64	横越町　天王杉	平安	遺物包含地	133	新津市　草水町1丁目	旧石器・縄文・平安	窯跡	202	村松町　山ノ入	平安・中世	遺物包含地
65	横越町　上郷	奈良・平安	遺物包含地	134	新津市　古通	平安	遺物包含地	203	新津市　山王浦	平安	遺物包含地
66	横越町　上郷B	奈良・平安	遺物包含地	135	新津市　川口乙	平安	遺物包含地	204	新津市　土手外	平安・中世	遺物包含地
67	横越町　上郷C	平安	遺物包含地	136	新津市　金津初越B	奈良・平安	遺物包含地	205	新津市　道上	平安	遺物包含地
68	横越町　新田郷	平安	遺物包含地	137	新津市　中谷内	平安	遺物包含地				
69	豊栄市　長場	平安	遺物包含地	138	新津市　内野	平安	遺物包含地				

（国土地理院　新潟・新津　1996年　1/50,000 → 1/100,000）

第２図　新津市周辺の古代遺跡分布図

文時代遺跡とされ〔川上ほか1989〕、平遺跡・草水町２丁目窯跡では1998年度の調査で市内ではほとんど確認されない縄文草創期前半の遺物が検出された。この他縄文中期～後期の遺跡として秋葉遺跡がある。

弥生時代の遺跡　市内で５遺跡が確認されている。主に八幡山遺跡〔川上1994、渡邊1994〕とその周辺の埋葬地遺跡〔川上ほか1989〕、居村Ｃ遺跡（Ｄ・Ｅ地点）〔川上1996、渡邊ほか1997〕であり、いずれも弥生時代後期に属する。特に八幡山遺跡は一定期間定住していた拠点集落と見られる高地性環濠集落で、二重の環濠・竪穴住居・炉跡・前方後方形墳墓が確認されている。遺物は東北系と北陸系の弥生土器が出土しており、当該地域の弥生時代を考える上で重要な遺跡である。平野部の舟戸遺跡〔川上1995〕でも遺物が出土しているが、平野部に立地する遺跡は少ない。

古墳時代　市内で10遺跡が確認されている。古墳時代初頭に八幡山遺跡前方後方墳、前期には八幡山遺跡の北西端に古津八幡山古墳が造営される（墳丘約60m・造り出し付き円墳）〔甘粕・川村ほか1992〕。古墳に隣接する舟戸遺跡・高矢Ｃ遺跡は中期の遺跡であり、丘陵縁辺や端部に立地する。舟戸遺跡では前期頃の竪穴住居跡が検出され、古墳との関連が注目されている。平野部の沖ノ羽遺跡〔星野ほか1996〕・上浦Ｂ遺跡では古墳時代前・中期の土師器が出土し、結遺跡〔川上ほか1989〕では古墳時代後期の内面黒色処理を施した高杯が出土している。

奈良・平安時代の遺跡　市内で43遺跡確認されている。平野部には集落遺跡が多く立地し、丘陵裾部には製鉄遺跡、須恵器・土師器窯跡などの生産遺跡が集中している。新津丘陵窯跡群は新津丘陵北東斜面に分布し、七本松窯跡・草水町２丁目窯跡などがある。製鉄遺跡は居村遺跡・大入Ｃ遺跡などがあり、９世紀第２四半期以降とされる〔渡邊1997〕。平野部に位置する上浦Ａ・Ｂ遺跡では掘立柱建物が発見され、Ａ遺跡〔渡邊1992、川上1997〕では円面硯や銅製帯金具が、Ｂ遺跡では三彩小壷や多量の墨書土器が出土している。Ａ遺跡の年代は出土遺物の年代観から９世紀と考えられる。上浦Ｂ遺跡については未報告であるので遺跡の概要は不明であるが、９世紀中葉～後葉の集落と考えられている。また遺跡周辺として横越町の天王杉遺跡があげられる。天王杉遺跡は当該遺跡とは小阿賀野川をはさんで対岸に位置し、立地も埋没した自然堤防上の微高地という共通性がある。時期は平安時代中期（９世紀後半～10世紀前半）と鎌倉時代末～南北朝時代（14世紀）になる。

中世の遺跡　市内で25遺跡確認されているが、城館跡が８か所、山城として東島城・金津城〔横山・竹田ほか1987〕がある。集落跡は平野部微高地に立地するが、自然堤防上の遺跡の実態がよく分らなかったが、江内遺跡〔春日ほか1996〕の発掘に伴い、14～15世紀の集落が明らかになった。また細池遺跡〔小池ほか1994〕では中世以降の圃場の各単位施設と思われる遺構が検出されている。

近世の遺跡　集落跡は中世と同じ平野部微高地に立地しており、実態は不明である。江内遺跡で17世紀前半からの集落の一部が明らかにされている。しかし新津丘陵を中心とした地域がいったいどのような状況にあったのかは全く不明である。

3　歴史的環境

古墳時代の越後国については文献史料では不明な点が多い。越後平野に立地する古墳は巻町の菖蒲塚古墳・山谷古墳や三条市の保内三王山古墳群などいずれも前期のもので、５世紀代には越後平野で古墳は造営されなくなり、５世紀後半以降は高田平野・魚野川流域に造営されるようになる。

越国の領域については第１段階（３～４世紀）は旧越前国（越前・加賀・能登）、第２段階（５～６世紀）は旧越中国（頚城・古志・魚沼・蒲原４郡まで含む）まで、第３段階（７世紀中～）は渟足・磐舟柵までとし、次第

に北上していく様が伺える〔米沢1965・1980〕。『続日本紀』大宝２年（702）３月条には越中国４郡を割いて越後国に編入するとあり、頚城・古志・魚沼・蒲原の４郡がこれに当たるとされ、これにより越中国の領域が確定した。最終的に越後国の領域が確定するのは、和銅５年（712）にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。

古代の新津市域は蒲原郡に属し、その郡域は概ね三条市以北阿賀野川以西の越後平野と推定され、南北朝期に蒲原郡の郡域が旧沼垂郡を含む領域に拡大するまでは郡域に大幅な変更はないと思われる。蒲原郡内には10世紀成立の『和名類聚抄』段階で桜井・勇礼・青海・小伏・日置の５郷が存し、桜井・勇礼・青海・小伏の４郷について所在地が比定できることから、新津市域は日置郷に当たると考えられ、郷域は新津丘陵の北端部を中心に阿賀野川以西信濃川以東、新津市・五泉市・小須戸町・田上町の範囲と推定されている。

従来蒲原郡の詳細な郡域の検討はなされてこなかったが、近年沼垂郡に関する資料が追加されたことにより、沼垂郡に隣接する蒲原郡との郡界が推定できるのではないかと考えられる。その資料とは所謂二条大路木簡と呼ばれる木簡群に含まれ、平城京左京三条二坊にあるＳＤ5300から出土した木簡である。

越後国沼足郡深江　　（72）×（14）×３　6059型式

〔『平城宮発掘調査出土木簡概報（二十九）－二条大路木簡三－』35上〕

木簡の年代は天平７・８年（735・736）を中心にして下限が天平８年とされる木簡群に含まれている。型式から付札様木簡であり、文字内容は国郡郷名であると考えられる。

『和名類聚抄』には沼足郡、つまり沼垂郡に深江郷はなく、今まで知られていなかった郷名である。『和名抄』において沼垂郡には足羽・沼垂・賀地の３郷がみられ、足羽郷は不明ながら、それぞれ賀地郷は阿賀北の加治川周辺、沼垂郷は渟足柵推定地の新潟市山ノ下周辺に比定できる〔小林1995〕。よってそれ以外の土地で「深江」の語意に合致する地として沼垂郡の南に当たる、亀田町・横越町周辺が推定される。特に横越町はかつて横越島と呼ばれ、信濃川・阿賀野川・小阿賀野川・新潟砂丘に囲まれた水害常習地帯であった〔立木1999〕。にも関わらず、新潟砂丘や周囲の自然堤防上に小丸山・上郷・川根谷地墓所など奈良・平安時代の集落遺跡が多数みられる。中でも小丸山遺跡は砂丘上に掘立建物が営まれ、多数の墨書土器や緑釉陶器が出土し、一定の勢力を持つ上層農民層の居宅とされている〔川村1989〕。深江郷は「国造本紀」（『先代旧事本紀』巻十）にみられる高志深江国造の本拠地と考えられ、このようにまとまりのある集落が存在する亀田・横越一帯に深江郷を比定するのは妥当な見解と思われる。

以上のように深江郷を比定すると、従来漠然と阿賀野川を境として南北に郡を比定していた蒲原・沼垂郡について、横越町・新津市周辺については阿賀野川の支流である小阿賀野川を郡界とする考え方が推測できる。当該遺跡は小阿賀野川に近接しており、おそらくは沼垂郡との郡界に近かったと思われる。

古代の蒲原郡には、宝亀11年（780）の「西大寺資財流記帳」（『寧楽遺文』中巻）に西大寺の荘園として鶉橋庄・槐田庄が見られる。同史料に「越後国水田并墾田地帳景雲三年」とあることから、成立はいずれもそれ以前、８世紀中葉とされる。所在地については式内社名から、鶉橋庄は五泉市橋田、槐田庄は三条市周辺とされている。これらの荘園に新津市域が関わっていたのかは不明である。

須恵器生産は新津丘陵において早ければ７世紀後半には始まり、８世紀前半～９世紀中頃が主な操業時期とされる。これは越後国内の他地域の須恵器生産動向とほぼ一致しており、いわゆる「一郡一窯体制」と言われている。ところが９世紀前半～中葉には佐渡小泊窯の製品が越後国全域に流通するという画期的変化が生じる〔坂井1996〕。また他にも新津丘陵北西側の金津地区に金津丘陵製鉄遺跡群があり、製鉄・窯跡群が古代の新津市域の産業の中心となっていたと見られる。低湿地や潟湖が大部分を占めていた越後平野の中で新津丘陵は重要な位置にあったと思われ、文献史料上は確認できないが、沼垂柵や国府津である蒲原津とも

何らかの関係があった可能性がある。

11世紀後半に各地で成立し始めた公領のひとつである金津保は新津市域に所在したとされる。金津　保の初見は建武3年（1336）11月18日「羽黒義成軍忠状写」で「同二日、引篭于金津保新津城、対于小国政光以下御敵等、致散々合戦畢、」（『新潟県史』資料編4－1935）とあり、北朝方である三浦和田（羽黒）義成は金津保にあった新津城に篭り、南朝方の小国政光らと戦ったとある。この史料によって金津保には新津城が含まれていたとわかり、この新津城は新津城・程島館・東島城のいずれかにあたるとされる〔木村1993〕。また天正5年（1577）「三条衆給分帳」に「金津保之内遊川」（『新潟県史』資料編5－2704）とある遊川は田上町湯川と見られ、さらに天文13年（1544）10月10日「上杉玄清定実知行宛行状」・同「長尾晴景副状」（『新潟県史』資料編4－1495・1496）に「金津保下条村」とあるのは、五泉市下条に当たるとされる。以上のことから金津保の領域は年代によって若干の変化があったとしても、ほぼ現在の新津市～田上町北部と新津丘陵の五泉市側までも含む範囲であったと思われる。

院政期～鎌倉初期には建仁元年（1202）3月4日に「城四郎長茂并伴類新津四郎已下、於吉野奥被誅畢」（『吾妻鏡』）とあり、新津四郎という金津保に何らかの関連をもつ人物が見られる。

南北朝動乱期には阿賀北の北朝方佐々木加地景綱らと、刈羽・魚沼地域に勢力を置く南朝方の小国氏らの蒲原津をめぐっての攻防が続き、阿賀野川流域である金津保つまり新津市域はその中で拠点の一つとして注目されていたと思われる。その後も越後守護となった上杉氏・守護代長尾氏にとって、その支配に抵抗する阿賀北の国人層、本庄・色部・中条・佐々木加地氏らを統制するために金津保は地理的に極めて重要な拠点であった。そのため金津保は国衙領として守護の支配下に置かれることとなる。

天正6年（1578）3月上杉謙信の死後、養子である景勝・景虎の間で後継争い「御館の乱」がおこる。この乱に景勝方として参戦した新津氏は、それまで金津保の中心勢力であった平賀氏に替わり以後領主となった。そして慶長3年（1598）景勝とともに会津へと国替えさせられるまで、新津氏が金津保を中心により発展することとなった。

近世に入り、越後平野では新発田藩によって新田開発に伴う治水工事が行われるようになった。また近世後期には町人請負による新田開発が盛んになり、潟の干拓が行われた。阿賀野川などの河川も水害対策のために掘割を掘削するなどの普請がなされた。『中蒲原郡誌』によれば、遺跡の所在する現大字東金沢を含む旧阿賀浦村は元和元年（1615）に開発されたようで、旧阿賀浦村はこの開発により上興野・下興野・中興野・四興野に分かれ、その後上金沢・下金沢・大安寺・中新田に改称した。「興野」・「郷屋」の地名は天正から慶長期に成立した村に付けられたもので〔金子1986〕、新発田藩による治水土木工事も慶長期以降盛んに行われており、16世紀末～17世紀に越後平野が開発されていることが窺える。

第Ⅲ章　調査の概要

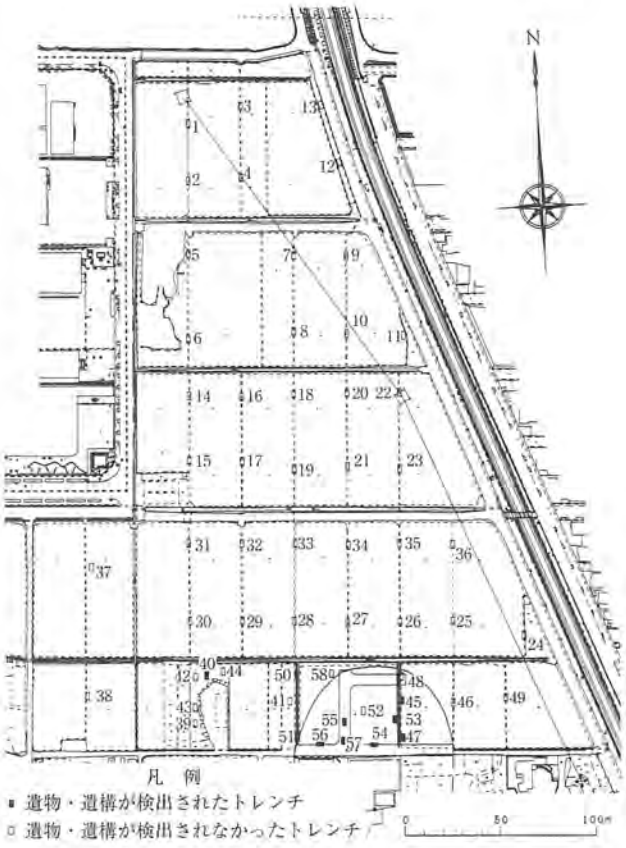
1　試掘・確認調査（第３図）

川口土地区画整理組合の依頼を受けて平成７年11月27日～12月１日の５日間にわたって試掘調査を実施した。開発予定面積は約72,956㎡である。試掘調査は幅２ｍ、長さ３ｍ程度のトレンチを51か所設定した。調査面積は約306㎡である。調査はバックホウで表土から地山まで徐々に掘り下げた後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を確認し記録した。トレンチの位置は耕作になるべく支障が少ないように畦畔の位置に設定したため、等間隔にはなっていない。また、耕作に影響がないように掘削深度を概ね１ｍ前後としたため、トレンチによっては基盤層（地山）に達していない所もある。

調査の結果、45Ｔで遺物が多く出土し、42～48Ｔ・43～46Ｔ・39～47Ｔラインで包含層に相当する土層が検出されたことから遺跡が存在することが明らかとなった。遺構は検出されなかった。遺跡名は小字名より「川口乙遺跡」とした。遺跡の広がりを確定するためには、今回調査ができなかった50Ｔ・48Ｔ間の土砂置き場と44Ｔ・50Ｔ間の水田を追加調査する必要が生じた。

追加の確認調査は平成８年４月15日に土砂置き場を対象として実施したが、場所によっては旧表土面まで３ｍ以上も土砂が堆積しており調査に支障をきたした。トレンチは試掘調査と同じ大きさで７か所設定し、トレンチ番号は前年調査の続き番号を付けた。調査面積は約42㎡である。調査の結果、53Ｔ・57Ｔで多量の遺物が出土した。57Ｔでは極めて多くの遺物が出土したため、保存を考慮しバックホウによる遺物包含層の掘削を途中でとりやめた。その後、記録をとるため人力によって幅約20㎝で掘り下げた。遺構は54Ｔで柱穴状遺構が検出された。

試掘・確認調査の結果、遺跡範囲は開発予定区域を一部含み、さらに北潟集落がある南側へ広がっていると推測される。



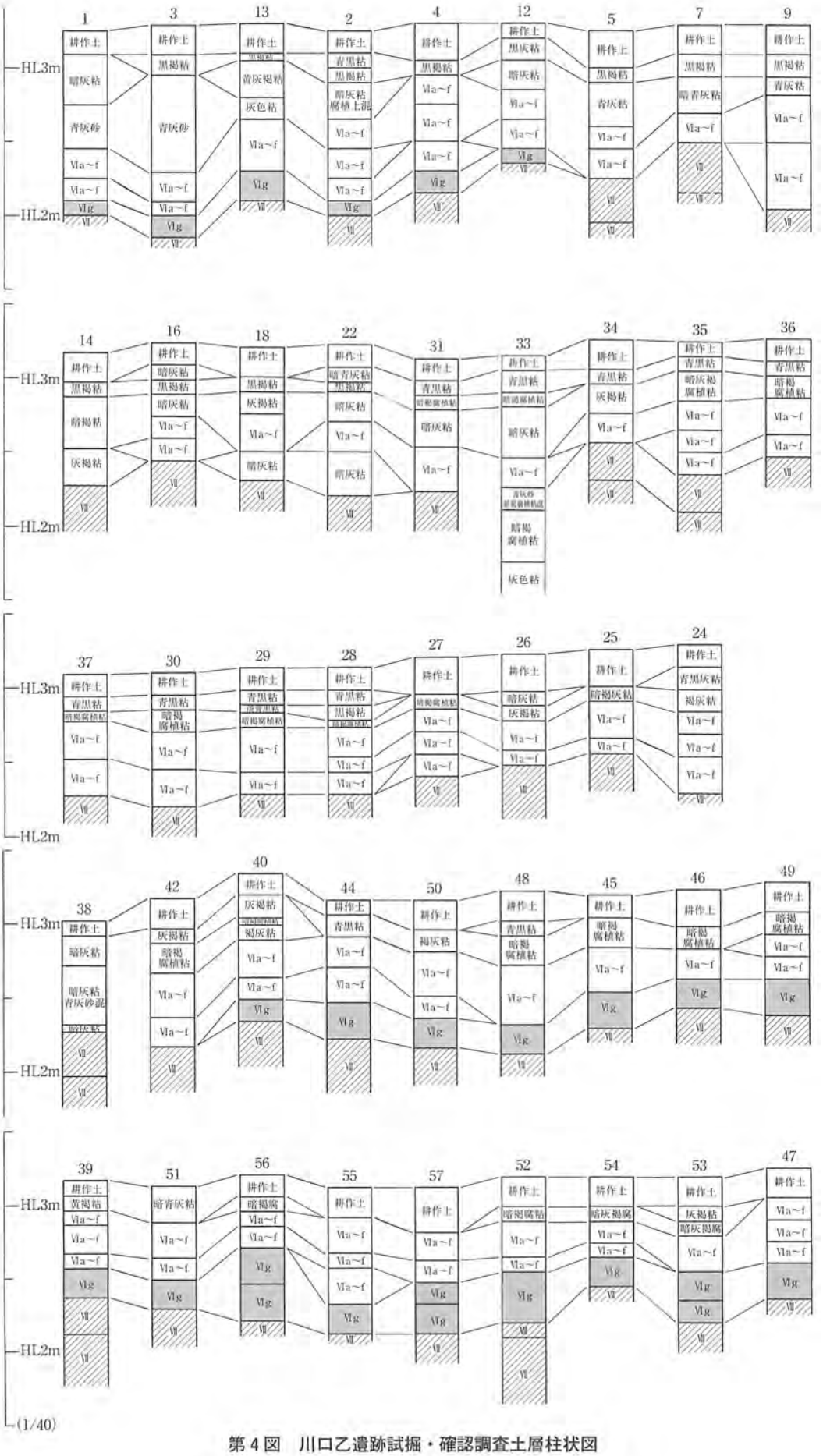
第３図　川口乙遺跡試掘・確認調査位置図（1/4,000）

2　発掘調査

A　調査方法

1）現　　況

現況は水田及び道路である。一部は建設会社の土砂置き場として利用されている。南側は建設会社の作業所に接し、東側にはＪＲ信越本線が通る。隣接して北西には上浦Ｂ遺跡、北東には川口甲遺跡が所在する。



第4図　川口乙遺跡試掘・確認調査土層柱状図

2）グリッドの設定

グリッドを設定するにあたっては、開発予定区域南側の道路センター杭を概ね基準線とし、基準線をもとに10mの方眼を組み、これを大グリッドとしたものである。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として南北方向をアルファベット（大文字）、東西方向をアラビア数字とし、この組み合わせによって表示した。大グリッドをさらに2m方眼に区分して、北西隅から南東隅の順で1から25の小グリッドに分割し「14Ⅰ22」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した（図版4）。

発掘調査区の2点の座標は次のとおりである。15H（日本測地系　X座標：201421.435・Y座標：54339.875、世界測地系　X座標：201770.9040・Y座標：54058.0333）・15J（日本測地系　X座標：201401.457・Y座標：54338.930、世界測地系　X座標：201750.9261・Y座標：54057.0889）。15H杭で短軸方向は真北に対し3度5分12秒東偏している。磁北は真北に対し7度20分0秒西偏する。なお、図版での表記は日本測地系に拠っている。

3）調査方法

①表土剥ぎ　試掘・確認調査によって遺物の出土が希薄と予測されたことから、遺物包含層（Ⅳg層）を残して遺構確認面（Ⅶ層）上面まで、遺物の出土に注意しながら重機（バックホウ）により除去した。排土は調査に支障のない調査区の外側にまとめた。調査区の南側は建設会社の作業所に近接していることから、基本土層の写真・実測終了後に矢板を打設した。また、周囲の水田面よりも低くなると、湛水してしまうために、表土剥ぎと並行して調査区の内側に土側溝を掘り、2吋の電動ポンプで24時間の強制排水を行った。土側溝は人力で掘削し、幅20cm、深さ20cm程の溝で、壁面を垂直に掘ると崩壊する恐れがあるためコンパネで木枠を作り、土側溝にはめた。土側溝によって遺構が分断されるおそれがあるが、土側溝がないと湛水して十分な遺構調査すらできなくなるので、やむを得ない措置と考えた。

②遺構検出・発掘　重機で掘削後、人力で精査を行い、遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区の外側へと搬出した。

③実測・写真　実測図は断面図を1／20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版・6×7版のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ　包含層出土遺物は小グリッド単位として取り上げた。遺構出土遺物は遺構単位・小グリッド単位で取り上げた。また、場合によって、番号を付しトータルステーションを用いてドットで取り上げた。

B　調査経過

5月23日～6月7日まで重機による表土剥ぎを行い、平行して排水路掘削を行った。試掘・確認調査の48・54・55・56・57Tの5か所がかかっていた。6月12日から人力による遺物包含層掘削と遺構検出作業を行う。6月25日大雨のため調査区ほぼ全域が水没した。7月4日遺構をほぼ完掘する。7月5日ローリングタワーから全体写真撮影を行う。7月12日ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行う。7月24日に機材を撤収し現場作業を終了した。

最終的な発掘調査面積は、上端面積905.67㎡、下端面積761.90㎡である。

C　調査体制

【平成13年度】

調査主体　新津市教育委員会（教育長　松井　弘）
担　　当　渡邊朋和（生涯学習課主査）
調 査 員　佐野博子・高野裕子・野水晃子（生涯学習課嘱託）
事 務 局　石崎義郎（生涯学習課課長）・目黒　正（同課長補佐）・荒木政幸（同係長）・田中茂夫（同主任）・立木宏明（同主査）・阿達哲二（同技士）
発掘作業員　石井勇次郎・植栗登美男・梅川春夫・窪田英輔・窪田忠栄・斎藤正吾・笹川諭吉・白井利夫・土橋厚作・西郡洋子・長谷川啓子・本多文雄・松田幸一・吉川春夫・渡辺　純
整理補助員　青野満穂子・五十嵐智子・伊藤操子・上杉裕美・小柳勢伊子・川岸美樹・川瀬純子・小菅和子・坂口千賀子・斉藤明子・須貝律子・田中暁穂・遠山直美・広瀬智子・真木千寿子・森岡綾子・山田正子・四柳茂美・渡辺淳子

3 整理作業

A 整理方法

1）遺　　物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0㎝）にして20箱である。大半が平安時代の須恵器・土師器で、近世以降の陶磁器・石製品が数点ある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③グリッド別の種別の重量計測。④接合。⑤遺構遺物の器種別の重量・個体数計測。⑥報告書掲載遺物の抽出。⑦実測図作成。観察表作成。⑧トレース図作成。⑨版下作成。トレースは整理補助員が2／3で作成した。

2）遺　　構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した1／40の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の1／200の遺構図面は測量業者が作成した原図を縮小して使用したものである。その他の図面は整理補助員がトレースを行い作成した。

B 整理経過

平成13年度は、発掘調査終了後3月までに出土遺物の水洗・注記・接合、写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図の校正作業を行った。

平成14年度は、遺物の実測と写真撮影、遺構実測図作成を行い、原図作成後、トレースを行った。この間職員は原稿執筆、図版のレイアウト・報告書の編集にあたった。

C 調査体制

【平成14年度】
調査主体　新津市教育委員会（教育長　松井　弘）
担　　当　渡邊朋和（生涯学習課主査）
調 査 員　佐野博子・高野裕子・澤野慶子（生涯学習課嘱託）

事　務　局　羽生隆夫（生涯学習課課長）・目黒　正（同課長補佐）・荒木政幸（同係長）・田中茂夫（同主任）・立木宏明（同主査）・阿達哲二（同技士）

整理補助員　青野満穂子・五十嵐智子・伊藤操子・上杉裕美・小柳勢伊子・川岸美樹・川瀬純子・小菅和子・坂口千賀子・斉藤明子・須貝律子・田中暁穂・遠山直美・波多野裕美・帆苅奈緒子・広瀬智子・真木千寿子・森岡綾子・山田弘美・山田正子・四柳茂美・渡辺淳子

水没状況（6月25日）

第Ⅳ章　遺　　跡

1　概　　要

川口乙遺跡では平安時代の遺物が出土し、同時代の遺構が検出された。

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0㎝）にして20箱である。ほとんどすべてが平安時代の須恵器・土師器で、石製品が数点と近世以降の陶磁器・土製品が数点ある。遺構は、土坑（ＳＫ）11基・ピット２基である。

2　層　　序（図版６）

基本土層は下記のとおり、大きくは７層、さらに細分類し21層に分けた。Ⅰ層は砂利道に伴う層、Ⅱ層はそのための盛土、Ⅲ層は旧耕作土、Ⅳ層は旧床土、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層は自然堆積土である。遺構確認面はⅦ層上面である。調査区周辺は既に現水田耕作土が除去されており、鉄工所の北側の砂利道からは一段低くなっていた。試掘・確認調査の土層柱状図が本調査の基本層序Ⅵ層以下から対応しているのはこのためである。

Ⅰａ層　黒褐色土（10YR３/１）しまりあり、粘性ややあり。現表土。

Ⅰｂ層　灰色土（7.5YR３/２）しまりややあり、粘性ややあり。

Ⅰｃ層　黒褐色土（５YR２/１）しまりややあり、粘性なし。砂利が多量に混入。

Ⅰｄ層　黒褐色土（10YR３/１）しまりなし、粘性なし。砂層。

Ⅰｅ層　灰色土（10Ｙ４/１）しまりややあり、粘性ややあり。粘土と砂。

Ⅰｆ層　灰褐色土（10YR４/１）しまりややあり、粘性あり。

Ⅱａ層　灰色土（５Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅱｂ層　黄灰色土（2.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅱｃ層　黄灰色土（2.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅲ　層　オリーブ黒色土（7.5Ｙ３/１）しまりあり、粘性あり。旧耕作土。

Ⅳ　層　オリーブ黒色土（7.5Ｙ３/１）しまりあり、粘性あり。旧床土。

Ⅴａ層　灰色土（7.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅴｂ層　灰色土（５Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵａ層　灰色土（7.5Ｙ５/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｂ層　灰色土（7.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｃ層　灰色土（7.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｄ層　灰色土（５Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｅ層　灰色土（7.5Ｙ４/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｆ層　灰色土（7.5Ｙ５/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。

Ⅵｇ層　灰色土（7.5Ｙ５/１）しまりあり、粘性あり。粘土層。遺物包含層。

Ⅶ　層　青灰色土　しまりあり、粘性あり。粘土層。

3　遺構各説

遺物包含層・遺構から出土した遺物が平安時代に限られるため、検出された遺構はすべて平安時代のものと思われる。

A　古代の遺構

1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ６（図版５・７）

14Ｉ22に位置する。長軸1.13m、短軸0.98m、深さ20cmを測る。覆土は単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ７（図版５・７）

14Ｊ７に位置する。調査区にかかった部分の最大幅は0.84m、深さ42cmを測る。覆土はブロック状に黒色土が混入し、意図的に埋められたものと思われる。遺物は出土していない。検出されたのは北端部分で、大部分は調査区外にあると思われる。

ＳＫ８（図版５・７）

14Ｊ４に位置する。長軸0.80m、短軸0.64m、深さ20cmを測る。覆土は２層に分かれる。覆土中からは土師器無台椀・長甕・小甕、叩き石が出土している（図版９・13）。

ＳＫ９（図版５）

14Ｊ４に位置する。長軸25cm、短軸25cm、深さ16cmを測る。断面図は作成していない。覆土中から土師器長甕が出土している。

ＳＫ10（図版５）

15Ｊ１に位置する。長軸30cm、短軸27cm、深さ22cmを測る。断面図は作成していない。覆土中からは土師器長甕・小甕が出土している（図版９）。

ＳＫ12（図版５・７）

15Ｊ５・10に位置する。長軸0.81m、深さ52cm、覆土は３層に分かれる。遺物は出土していない。南端は調査区外、北端は土側溝に切られる。

ＳＫ13（図版５・７）

14Ｊ３に位置する。長軸1.39m、短軸1.08m、深さ30cmを測る。覆土はブロック状に黒色土が混入し、意図的に埋められたものと思われる。遺物は出土していない。

ＳＫ16（図版５・８）

14Ｉ10・15、15Ｉ６・11に位置する。現存する長軸は4.13m、短軸2.23m、深さ40cmを測る。ＳＫ33とは切り合い関係にある。図面上はＳＫ33がＳＫ16を切っているが、覆土の堆積状況からみるとＳＫ16のほうが新しい。ＳＫ16は確認調査57Ｔによって上層部が攪乱されている。覆土は４層が遺存している。覆土中から須恵器無台杯・有台杯、土師器無台椀・長甕・小甕、叩き石、石器（砥石か？）が出土している（図版９・10・13）。

ＳＫ27（図版５・７）

14Ｇ15に位置する。長軸0.60m、短軸0.58m、深さ14cm覆土は単層である。覆土中から須恵器無台杯、土

師器長甕・小甕が出土している（図版11）。

ＳＫ32（図版５・８）

15Ｉ16に位置する。長軸0.78m、短軸0.64m、深さ15cmを測る。覆土は３層に分かれる。覆土中から土師器無台椀・長甕・小甕が出土している（図版11）。

ＳＫ33（図版５・８）

14Ｉ15・20に位置する。長軸2.50m、短軸1.40m、深さ28cmを測る。ＳＫ16に切られているため、覆土は最下層の１層だけが遺存している。遺物は須恵器無台杯、土師器無台椀・長甕・小甕が出土している（図版10・11）。

作業風景

第Ⅴ章　遺　　物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）で20箱である。ほとんどすべてが平安時代の遺物で、土器の他に若干の近世以降の陶磁器・鉄滓・石製品がある。

1　平安時代の遺物

平安時代の土器類には土師器・須恵器がある。黒色土器は出土していない。攪乱部分が多く遺物の出土量が少ないことから、包含層出土遺物に関しては小グリッド単位で重量を計測したのみで、器種ごとの集計はしていない。

A　土器の分類と記述

1）用語説明

成形・調整技法の表現は、山三賀Ⅱ遺跡の報告書〔坂井ほか1989〕の記載を参考に以下のとおりとした。

1、「ロクロナデ」－ロクロ・回転台使用、「ナデ」－ロクロ・回転台未使用。

2、「ロクロケズリ」－ロクロ・回転台使用、「ケズリ」－ロクロ・回転台未使用。

3、「カキメ」－ロクロ・回転台使用、「ハケメ」－ロクロ・回転台未使用。

4、「ミガキ」－ロクロ・回転台未使用。

5、「タタキメ」－外面、「あて具痕」－内面。

6、底部の「ヘラ切り」・「糸切り」はいずれもロクロの回転を利用したものである。回転ヘラ切り・回転糸切りとすべきものであるが、「回転」を省略した。「無調整」－切り離し後、調整を行わない。「再調整」－ロクロナデ・ナデ・ハケメ・ロクロケズリ・ケズリなどの調整を行う。

7、小甕底部の「無調整」は切り離し技法の認められないもの。

8、還元炎焼成の須恵器・酸化炎焼成の須恵器を区分して報告している。須恵器・土師器の区別は基本的に形態による区分を重視した。新津市周辺では須恵器無台杯はヘラ切りで還元炎焼成、土師器無台椀は糸切りで酸化炎焼成のものが大半である。前者は底部が大きい「杯形」、後者は底部が小さい「椀形」を呈する。しかし、新津市内の古代の遺跡には、ヘラ切りで酸化炎焼成の無台杯が一定量出土することが明らかとなってきている。これらを焼成の違いから土師器とする報告書も見られるが、技術形態学を根拠に須恵器として取り扱う。これは器の形態（器形）を決めるのは製作者の意図的なものであるが、焼きあがりは製作者の意図しない場合が十分にあると考えるからである。川口乙遺跡においても酸化炎焼成の須恵器が出土している。

2）分　　類

須恵器

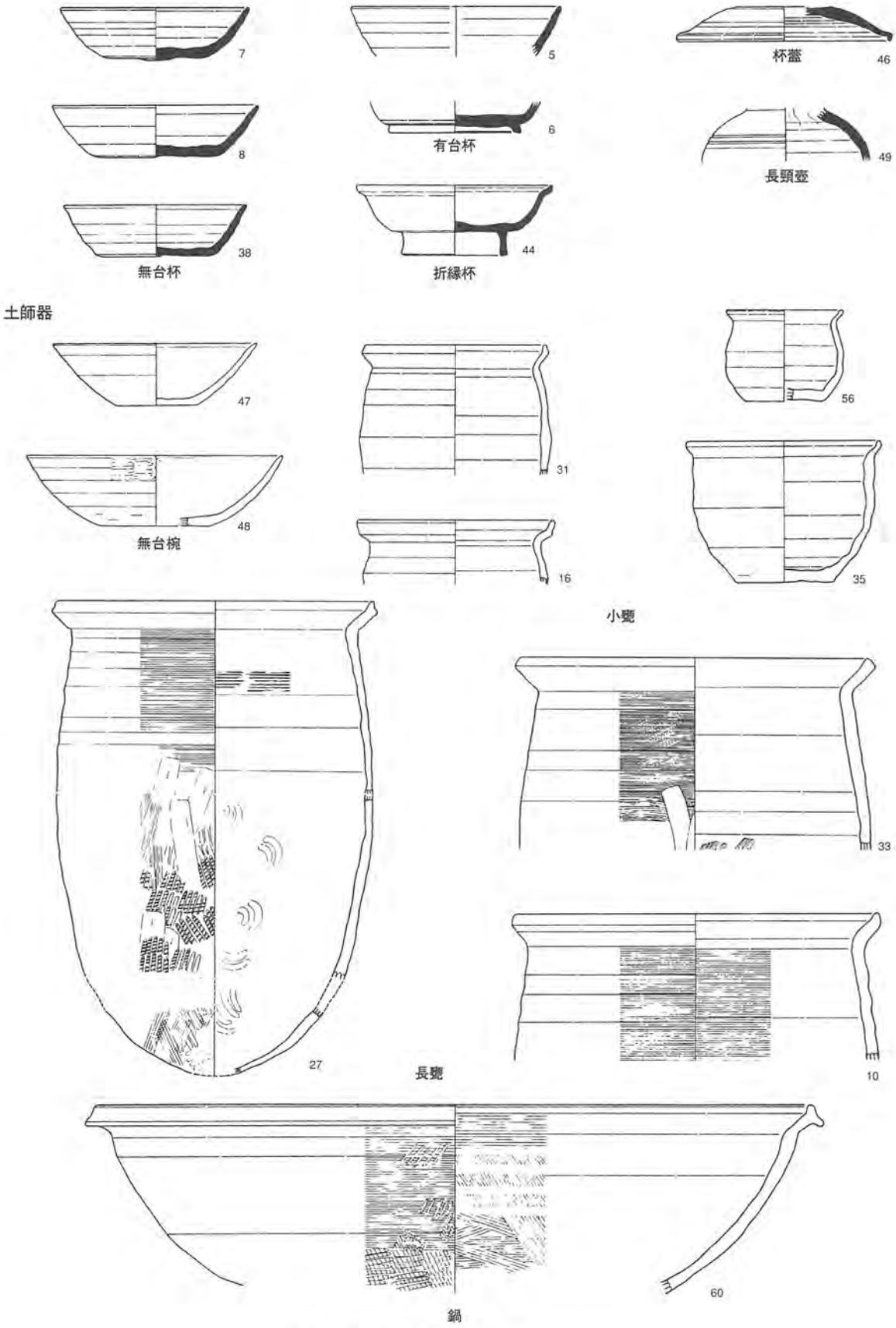
食膳具と貯蔵具がある。食膳具には無台杯・有台杯・折縁杯・杯蓋があり、貯蔵具には長頸壺がある。

無台杯　杯のうち高台を持たないもの。佐渡小泊産（7）と新津産（8・38）がある。

有台杯　杯のうち高台を持つもの。新津産のものがある（5・6）。

折縁杯　有台の杯で、口縁部を外側に折り、端部が上方へ向くもの。新津産で酸化炎焼成されている（44）。

須恵器



第５図　川口乙遺跡土器分類図（S＝1/4）

杯蓋　有台杯に伴う蓋。佐渡小泊産のものが見られる（46）。

長頸壺　肩部が出土している。沈線が２本巡る（49）。

土師器

ロクロあるいは回転台を用いた調整がなされており、焼成は全て酸化炎焼成である。食膳具と煮炊具があり、食膳具には無台椀があり、煮炊具には小甕・長甕・鍋がある。

無台椀　内外面ロクロナデ、底部糸切り無調整を典型とする無台の椀。口縁部の内外面をヘラミガキ、体部外面下半をロクロケズリするもの（48）もある。

小甕　口縁部から体部下半までロクロナデ調整される小型の甕。内外面をカキメ調整するもの（１）、体部外面下半をロクロケズリするもの（32・35）口縁端部の形状は上方に短く屈曲するもの（31）、外側に長く開くもの（16）がある。法量は14cm（32）、8.2～9.5cm（19・35）、6.1cm（56）の３種類に分けられる。

長甕　口縁部ロクロナデ、頚部カキメ、体部タタキメ・ハケメ・ケズリで調整される丸底の甕。口縁端部は上方に摘み上げるようなもの（27）、面取りを施したようなもの（33）、丸くおさめるもの（10）の３形態が確認できる。

鍋　内面は口縁部にロクロナデ・カキメ、体部にハケメを行う。外面は体部上半にカキメ、下半はタタキメを行う。口縁端部は内・外側に摘む感じである（60）。

B　出土遺物各説

１）遺構出土遺物

ＳＫ８（図版９・13）

土師器無台椀・長甕・小甕（１・２・３）、叩き石（61）が確認されている。無台椀・長甕は小破片のため図化していない。小甕はいずれも内外面ロクロナデ調整され、１はさらに内外面ともカキメで調整する。２・３の底部は糸切り。61はＳＫ16出土のたたき石と接合した。両方の先端は細かく砕けた跡が認められる。

ＳＫ９

体部小破片のため図化はしていないが、土師器長甕が出土している。

ＳＫ10（図版９）

土師器長甕・小甕（４）が確認されている。長甕は体部小破片のため図化していない。４は内外面ロクロナデ調整である。

ＳＫ16（図版９・10・13）

須恵器有台杯（５・６）・無台杯（７・８）、土師器無台椀・長甕（９～12・14）・小甕（13・15～23）、たたき石、石器（62）が確認されている。６のロクロ回転方向は左、底部はヘラ切り。７・８は酸化炎焼成で底部ヘラ切り、いずれも新津産である。７のロクロ回転方向は右。土師器無台椀は小破片のため図化していない。９は外面カキメ、10～12は内外面にカキメ、14は体部下半資料で内面はタタキメ・ハケメ、外面はタタキメで調整している。13は口縁部の外反が弱く、頚部のくびれが小さい。13・16～23は内外面ロクロナデ調整を行い、20～22の外面下半はケズリがみられる。18の頚部には墨書がみられる。19・20・22・23のロクロ回転方向は右で、19・20・23の底部は糸切り、21は無調整である。62は砥石として使用された痕跡が残るが、製品としての砥石ではない。

ＳＫ27（図版11）

須恵器無台杯、土師器長甕（33・34）・小甕が確認されている。無台杯・小甕は小破片のため図化していない。33の内面はハケメ、外面はハケメとケズリによる調整がみられる。34は体部下半資料で内面はあて具痕、外面はタタキメで調整される。

ＳＫ32（図版11）

土師器無台椀・長甕（36）・小甕（35）が確認されている。無台椀は小破片のため図化していない。36は体部下半資料で内面は同心円あて具痕・ハケメ、外面はタタキメで調整される。35は底部糸切りで、ロクロ回転方向は右である。

ＳＫ33（図版10・11）

須恵器無台杯（24）、土師器無台椀・長甕（25～30）・小甕（31・32）が確認されている。24は底部ヘラ切り。ロクロ回転方向は左、佐渡小泊産である。土師器無台椀は小破片のため図化していない。25の内面はあて具痕・カキメ・タタキメ・ハケメ、外面はカキメ・ケズリ・タタキ・ハケメがみられる。26の内面はロクロナデ、外面はカキメである。27の内面はあて具痕・カキメ、外面はカキメ・ケズリ・タタキメ・ハケメでの調整である。28は内外面にカキメで調整している。29は体部である。内面は同心円あて具痕・ハケメ、外面は平行タタキメ・ケズリがみられる。30は内面に平行あて具痕、外面に平行タタキメが残る。31・32は内外面ロクロナデ調整である。32のロクロ回転方向は左である。

2）包含層出土遺物（図版12・13）

須恵器無台杯（37～43・45）・折縁杯（44）・杯蓋（46）・長頸壺（49）、土師器無台椀（47・48）・長甕（50～55）・小甕（56～59）・鍋（60）が確認されている。無台杯は底部が遺存していない43以外、ヘラ切りである。37は新津産、38～42・45は佐渡小泊産であるが、38・41のロクロ回転方向は右である。45底部外面に２文字の墨書が見られ１文字は「福」と読める。44は新津産で酸化炎焼成、底部はヘラ切りである。46は佐渡小泊産、ロクロ回転方向は左である。49は肩部の破片である。48の口縁部内外面にミガキがされる。50・53は内外面を、51・52は内面をカキメで調整している。56～59は内外面ロクロナデ調整である。59のロクロ回転方向は右、底部は無調整である。60の内面はカキメ・ハケメ、外面はカキメ・タタキメで調整する。

3）試掘・確認調査（図版13）

須恵器無台杯（63）・杯蓋、土師器無台椀・長甕（65・66）・小甕（64）・鍋、石製品、鉄滓（67）が確認されている。63は佐渡小泊産である。65・66の外面はカキメで調整している。

墨書（45）

第Ⅵ章　ま　と　め

1　遺　　構

調査区における遺構密度は低い。検出された遺構のほとんどは14Ｉ・15Ｉ・14Ｊ・15Ｊに位置し、確認面の標高は2.25～2.40mを示す。調査区全体をみると1.80～2.50mであることから、周辺に比べてやや微高地状を呈する部分に遺構が集中していることになる。13Ｊ～14Ｊをはじめ炭化物の層が薄く広がる地点が数か所散在していることから、この辺りは湿地に近い環境であったことが伺える。

遺構覆土の堆積状況を見ると、ＳＫ７・13では黒色粘土と灰色粘土がブロック状になっており、自然に埋没したのではなく、意図的に埋められたものと推測される。なお、建物跡を構成するピットは確認できなかった。

2　遺　　物

A　年　　代

器種ごとの集計は行っていないため具体的な数値は不明であるが、食膳具よりも煮炊具の比率が高い。中でも長甕の割合が高く、小甕・鍋が続く。食膳具の中では須恵器無台杯が圧倒的に多く、産地では小泊産が過半数を占めている。

須恵器無台杯を資料として川口乙遺跡の年代を見てみたい。ここでは寺道上遺跡〔渡邊ほか2001〕の分類・成果をもとに考えていきたい。無台杯の口径が13.0cm以上をⅠ類、12.0cm前後をⅡ類とする。新津産無台杯はⅠ類（8）・Ⅱ類（7・37）とも確認できる。佐渡小泊産須恵器は口径10.5cmのものもあるが、ほぼⅡ類（38～42・45）でⅠ類は見られない。佐渡小泊産須恵器の編年は下口沢→カメ畑→江ノ下となっている。川口乙遺跡ではⅠ類が見られないということからするとカメ畑窯跡段階以外の下口沢窯跡段階・江ノ下窯跡段階が考えられるが、Ⅱ類は各段階を通して生産されている法量であり、時期を特定するのは難しい。そこで、他器種に目を向けると底径13cm程の有台杯Ⅰ類に伴う口径14.0cmの杯蓋Ⅰ類が認められた。下口沢窯跡では杯蓋Ⅰ類の口径は14.5～16.2cm、江ノ下窯跡では12.2～12.5cm、13.4～14.4cmのものが確認されている。この杯蓋Ⅰ類を考慮にいれると、川口乙遺跡の杯蓋は江ノ下段階のものに比定可能かもしれない。新津丘陵では下口沢窯跡新段階の９世紀中頃には土師器生産が始まり、周辺の消費地では江ノ下窯跡段階では既に土師器食膳具が主体を占める。佐渡小泊産の無台杯Ⅰ類が見られないのが気になるが、食膳具における須恵器と土師器の割合から判断すると、川口乙遺跡の時期は新津で土師器食膳具が主体を占めるに至らない９世紀後半のカメ畑窯跡段階を中心とし、杯蓋Ⅰ類から江ノ下窯跡段階も若干含む時期としたい。

B　折縁杯について

折縁杯が明確に認識されたのは山三賀Ⅱ遺跡である〔坂井ほか1989〕。その折縁杯について近年、水澤幸一氏は「沼垂郡の８世紀第４四半期以降の窯のほとんどと、蒲原郡の滝谷窯で焼かれている。ただし新津丘陵での生産は、隣接する七本松窯や草水窯では認められない」としている〔水澤2001〕。この折縁杯は整理

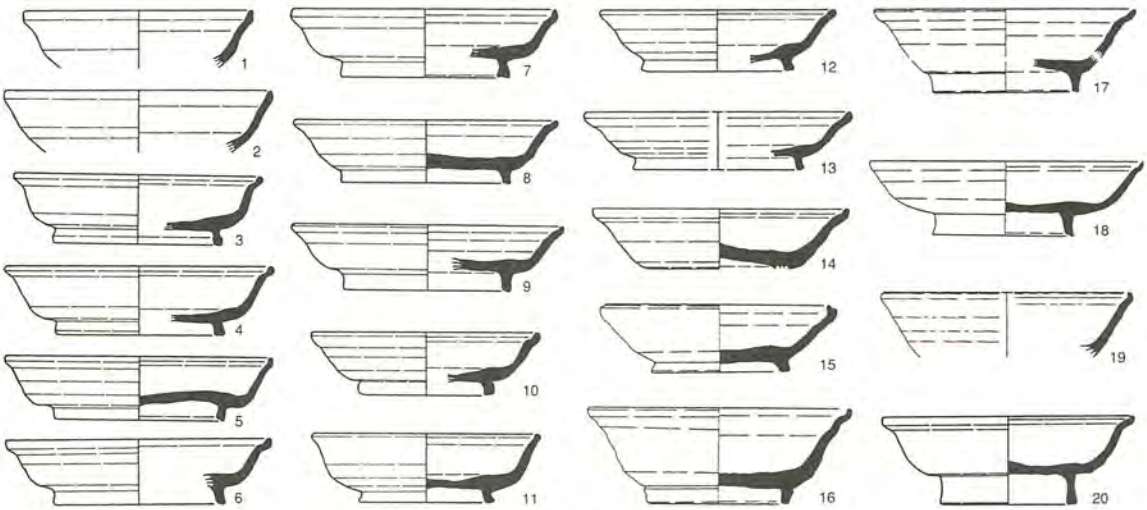
作業の始まった草水町２丁目窯跡でも生産されていたことが確認され、新津丘陵での生産が滝谷窯跡に限られたものではないことがわかった[注1)]。そこで、新津丘陵における折縁杯の生産や蒲原郡の消費遺跡について出土例を集めた。

生産地である草水町２丁目窯跡では図示したのは２点（１・２）であるが、今のところ須恵器窯灰原上層から４点が確認できる。１・２は口縁部の屈曲が弱いが、強いものも見られる。春日氏の御教示によると草水町２丁目窯跡灰原上層の年代は８世紀第４四半期である。滝谷窯跡では７点（３～９）が採集され〔川上ほか1989〕、隣接する七本松２号窯跡でも図示はしていないが口縁部の小破片が２点採集されている。滝谷窯跡の３～５は還元炎焼成、６～９は酸化炎焼成である。３・４は口縁部の外反、端部の折り返しが明瞭であるが、６以外の酸化炎焼成のものは口縁部の作りが曖昧である。時期差によるものかもしれない。５は焼き歪みが大きい。春日氏によると９世紀第３～４四半期に相当するとされている。

蒲原郡内の消費地としては以下の４遺跡が確認できた。上浦Ａ遺跡〔川上1997〕ではＳＤ16（10）・ＳＤ15（11）・ＳＫ５（12）・包含層（13）から出土している。４点とも阿賀北産とみられる。年代は９世紀第２四半期に比定されている〔渡邊ほか2001〕。加茂市鬼倉遺跡河川③区〔伊藤2001〕からは１点（14）が出土しており、阿賀北産である。年代は９世紀初頭から中頃とされている。新潟市小丸山遺跡ＳＥ７〔藤塚ほか1987〕からは浅身のもの（15）と深身のもの（16）、17は包含層出土、18は確認調査によるものである。年代は９世紀中頃に位置付けられている〔新潟市1994〕。新津市中谷内遺跡河１上層〔立木1999〕からも阿賀北産が１点（19）出土している。年代は９世紀第４四半期から10世紀前葉に比定されている。底部を欠く破片であるが深身である。川口乙遺跡包含層からは酸化炎焼成された新津産が１点（20）出土している。高めの高台が付く。

蒲原郡の消費地では中条町中倉遺跡〔水澤1999〕のようにまとまった個体数が出土することは極めて稀で、１遺跡１・２点が確認できるのみである。それもほとんどが阿賀北で生産されたものであり、新津丘陵産は川口乙遺跡だけである。新津丘陵では草水町２丁目窯・滝谷窯・七本松２号窯で生産されていたことは確認できたが、製品としてどの程度広まっていたかは不明である。また、量的にも郡を越えて分布している沼垂郡産に比較して極少量であったことが窺える。

注１）1993年本調査、2005年３月報告書刊行予定。



第６図　蒲原郡出土の折縁杯（Ｓ＝1/4）

引用・参考文献

甘粕　健・川村浩司ほか　1992　『古津八幡山古墳Ⅰ』新津市教育委員会

石川智紀ほか　1994　『磐越自動車道関係発掘調査報告書　沖ノ羽遺跡Ⅰ（A地区）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤秀和　2001　『国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書　鬼倉遺跡』加茂市教育委員会

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民族博物館研究報告』40　国立歴史民族博物館

春日真実　1991　「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会』8　新潟考古学談話会

春日真実　1997a　「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』6　北陸古代土器研究会

春日真実　1997b　「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7　北陸古代土器研究会

春日真実　1992　「越後・佐渡における須恵器生産終末期の様相」『北陸古代土器研究』2　北陸古代土器研究会

春日真実　1999　「考古編　第5章まとめ」『吉田町史』資料編1　考古・古代・中世　吉田町

春日真実ほか　1996　『磐越自動車道関係発掘調査報書　江内遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子　達　1986　「こうや（興野・郷屋）のつく地名の語る歴史」『研究収録』16　吉田商業高校

川上貞雄　1992　『川口甲遺跡発掘調査報告書』　新津市教育委員会

川上貞雄　1994　『八幡山遺跡Ⅰ　遺構編』新津市教育委員会

川上貞雄　1995　『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

川上貞雄　1996　『金津丘陵製鉄遺跡群　居村B・D地区』新津市教育委員会

川上貞雄　1997　『上浦A遺跡　新津市工業団地第2期工事地内発掘調査報告書』新津市教育委員会

川上貞雄　1989　「第二編　考古」『新津市史』資料編第1巻　原始・古代・中世　新津市史編纂委員会

川村浩司　1989　「越後の古代集落素描－遺跡の類型とその展開－」『新潟考古学談話会会報』第3号　新潟考古学談話会

木村宗文　1989　「資料解説－古代越後国と蒲原郡－」『新津市史』資料編第1巻　原始・古代・中世　新津市史編纂委員会

小池義人ほか　1994　『磐越自動者道関係発掘調査報告書　細池遺跡　寺道上遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小林昌二　1995　「「沼足郡深江」木簡の出土－付、平城京出土の越後・佐渡関係木簡－」『市史にいがた』第16号　新潟市

坂井秀弥　1996　「水辺の古代官衙遺跡－越後平野の内水面・舟運・漁業－」『越と古代の北陸』古代王権と交流3　名著出版

坂井秀弥ほか　1989　『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所

坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991　「佐渡の須恵器」『新潟考古』2　新潟県考古学会

鈴木郁夫　1989　「第一編　自然」『新津市史』資料編第1巻　原始・古代・中世　新津市史編纂委員会

立木宏明　2000　『川根遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

立木宏明ほか　1998　『細池遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

立木宏明ほか　1999　『中谷内遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

立木由理子ほか　1999　『国道49号線横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ　牛道遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査事業団　1993　「上浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟市史編さん原始古代中世史部会　1994　『新潟市史』資料編1　原始・古代・中世　新潟市

藤塚　明・小池邦明・渡邊朋和　1987　『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』新潟市教育委員会

星野信明・石川智紀ほか　1996　『磐越自動車道関係発掘調査報告書　沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

水澤幸一　2001　「折縁坏とその背景」『新潟考古学談話会会報』第23号　新潟考古学談話会

水澤幸一　1999　『中倉遺跡3次』中条町教育委員会

横山勝栄・竹田和夫ほか　1987　『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会

米沢　康　1965　「大化前代における越の史的位置」『信濃』17－1　信濃史学会
米沢　康　1965　『越中古代史の研究』　越飛文化研究会
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32－6　信濃史学会
渡邊朋和　1991　『長沼遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
渡邊朋和　1992　『上浦遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
渡邊朋和　1994　『八幡山遺跡発掘調査報告書－平成5年度範囲確認調査－』新津市教育委員会
渡邊朋和ほか　1997　『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ　居村遺跡Ｅ・Ａ・Ｃ地点、大入遺跡Ａ地点』新津市教育委員会
渡邊朋和ほか　1998　『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ（分析・考察編）』新津市教育委員会
渡邊朋和ほか　2001　『寺道上遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

別表１　主要遺構一覧表

遺構名	所属時期	グリッド	長軸・最大幅 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	主軸方位	遺構図版頁	遺物の有無	遺物図版頁
ＳＫ６	古　代	14Ｉ22	1.13	0.98	0.20		５・７	無し	
ＳＫ７	古　代	14J７	(0.84)		0.42		５・７	無し	
ＳＫ８	古　代	14J４	0.80	0.64	0.20		５・７	有り	９・13
ＳＫ９	古　代	14J４	0.25	0.25	0.16		５	有り	
ＳＫ10	古　代	15J１	0.30	0.27	0.22		５	有り	９
ＳＫ12	古　代	15J５・10	0.81		0.52		５・７	無し	
ＳＫ13	古　代	14J３	1.39	1.08	0.30		５・７	無し	
ＳＫ16	古　代	14Ｉ10・15、15Ｉ６・11	(4.13)	(2.23)	(0.40)		５・８	有り	９・10・13
ＳＫ27	古　代	14G15	0.60	0.58	0.14		５・７	有り	11
ＳＫ32	古　代	15I16	0.78	0.64	0.15		５・８	有り	11
ＳＫ33	古　代	14I15・20	(2.50)	(1.40)	(0.28)		５・８	有り	10・11

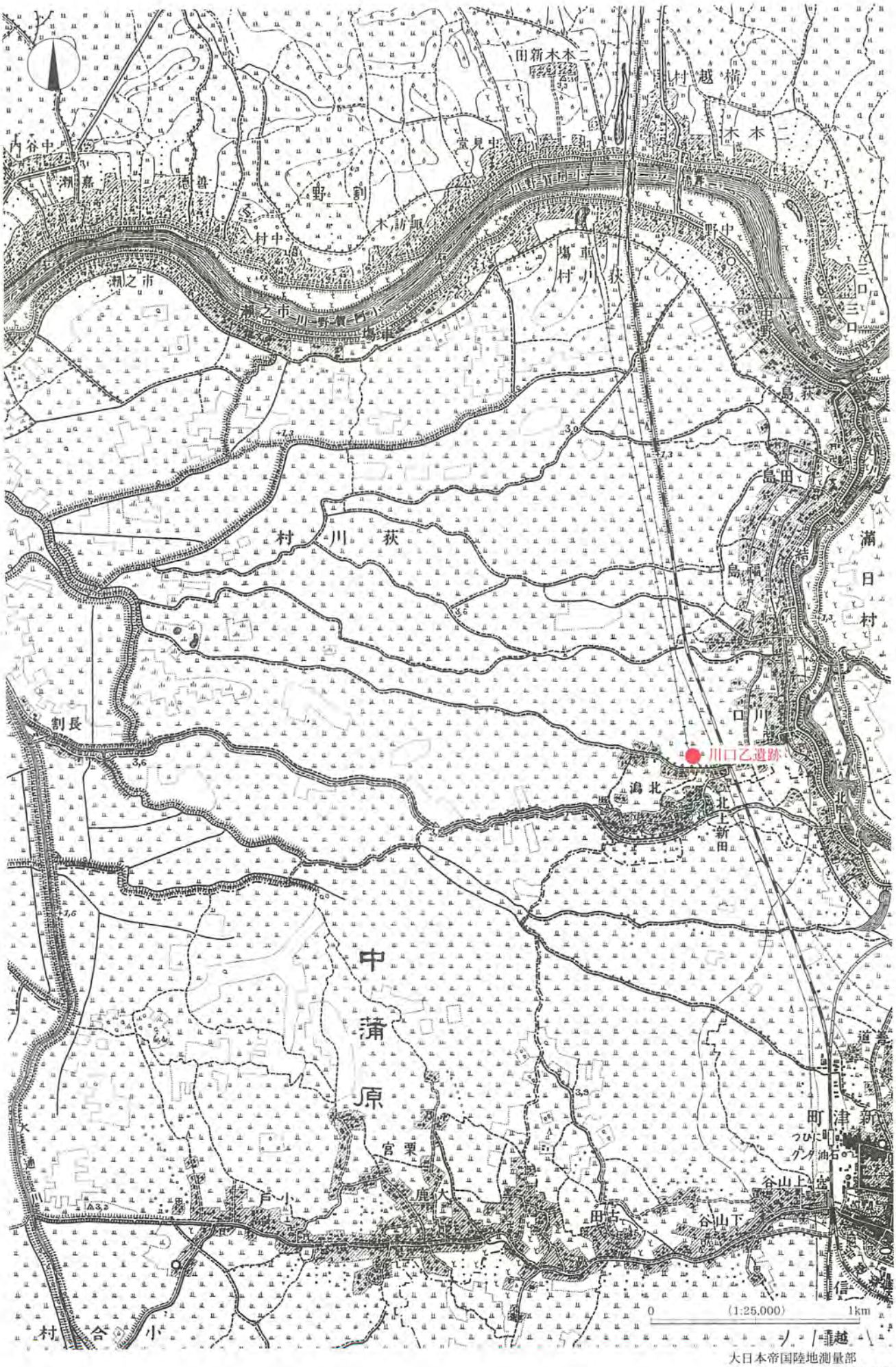
別表2　遺物観察表

凡　例

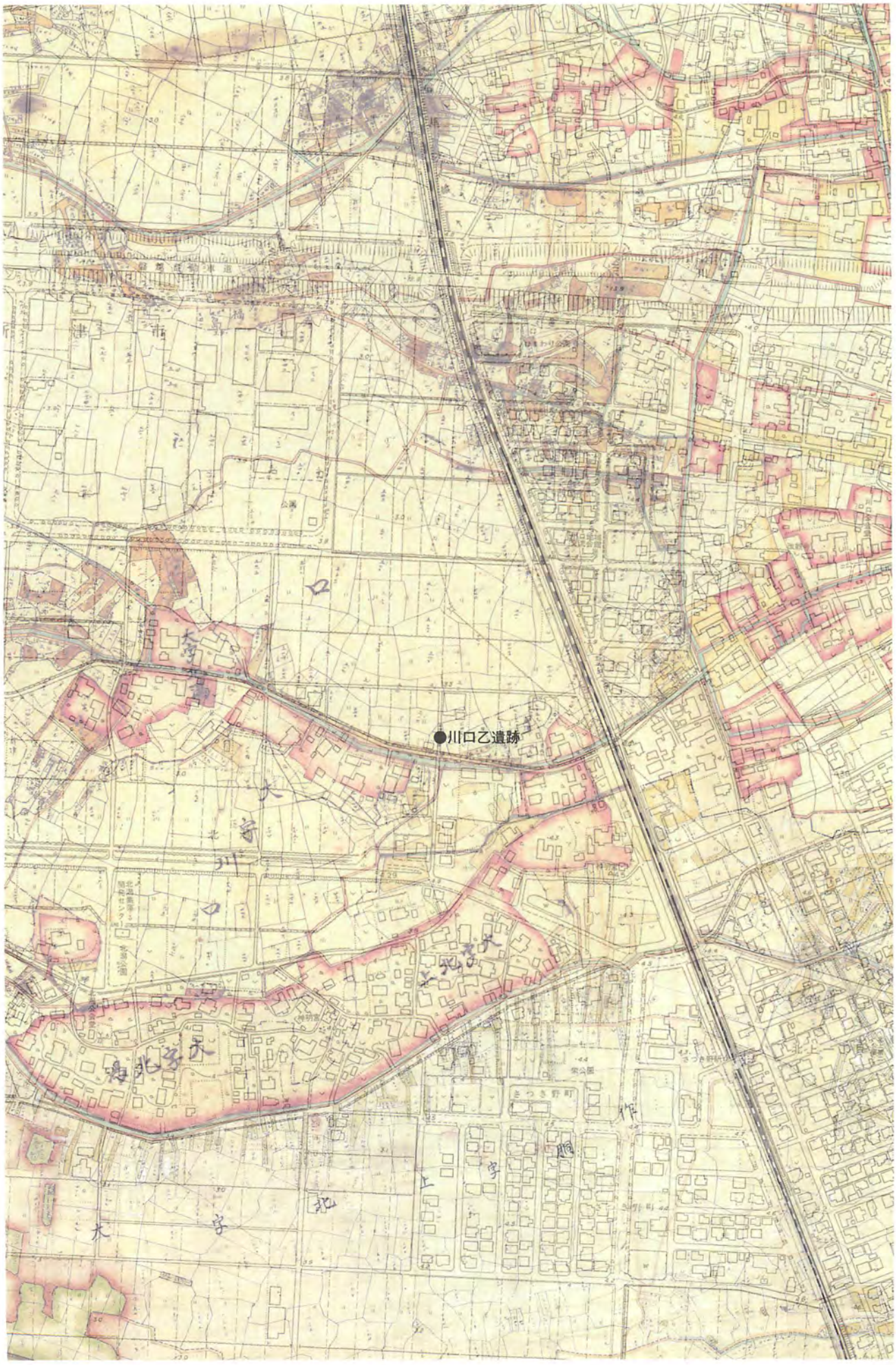
1　出土位置　遺構名・グリッド名を記した。
2　器　　種　第Ⅴ章に記した。
3　径高指数　器高/口径×100
4　底径指数　底径/口径×100
5　法　　量　口径・底径・器高を示す。括弧付の数値は遺存率が低いものである。
6　胎　　土　須恵器・土師器について胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。
7　色　　調　『新版標準土色帳』[小山・竹原 1967] の記号を記した。
8　焼　　成　酸化炎焼成・還元炎焼成の区別を記した。須恵器で酸化としたものは褐色あるいは橙色の色調で軟質なものを表す。白色・灰白色のものは含めていない。
9　手　　法　特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」・「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。「無調整」はそれが認められないもの。回転方向は回転台の回転方向を表す。底部調整やロクロケズリ・ロクロナデから判断した。
10　遺 存 率　分数表示で遺存割合を示した。

No.	出土位置		種別	器種	法量(cm)			径高指数	底径指数	胎土	色調	焼成	手法				遺存率			備考	
	遺構名	グリッド			口径	底径	器高						外面	内面	底部	回転方向	口縁部	底部	全体		
1	SK8	14J4	土師器	小甕	13.0					石・長・雲・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・カキメ			15/36				
2	SK8	14J4 15I11・23	土師器	小甕		7.4				石・長・チ・角	淡橙 5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			9/36			
3	SK8	14J4	土師器	小甕		6.5				石・長・チ・焼・海	浅黄橙 7.5YR8/3	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り			10/36			
4	SK10	15J1	土師器	小甕	(14.0)					石・長・チ・角	にぶい黄橙 10YR7/2	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			2/36				
5	SK16	14I15	須恵器	有台杯	13.8					石・長	灰 N5/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36				
6	SK16	14I15 15J7	須恵器	有台杯		8.8				石・長・白	灰 N4/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	左		19/36		No.5と同一か？	
7	SK16 SK33	14I14 14I15	須恵器	無台杯	12.3	7.0	3.4	27.6	56.9	石・長・焼	橙 5YR7/6	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	18/36	36/36	20/36		新津
8	SK16	14I14・15 57T	須恵器	無台杯	13.5	8.5	3.5	25.9	63.0	石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		9/36	15/36	20/36		新津
9	SK16	15I11	土師器	長甕	(23.0)					石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	カキメ				3/36				
10	SK16	14I15	土師器	長甕	24.0					石・長・雲・チ・角	浅黄橙 10YR8/4	酸化	カキメ	カキメ			9/36				
11	SK16	14I15	土師器	長甕	(21.0)					石・長・チ	浅黄橙 10YR8/3	酸化	カキメ	カキメ			1/36				
12	SK16	14I15	土師器	長甕	19.6					石・長・チ・角・海	浅黄橙 10YR8/4	酸化	カキメ	カキメ			1/36				
13	SK16	14I15	土師器	小甕	14.0					石・長・チ	にぶい橙 7.5YR7/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36				
14	SK16 SK33	14I15 14I15 16I25　14J4 一括・5	土師器	長甕						石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	タタキメ	タタキメ・ハケメ							
15	SK16 SK32 SK33	14I15 15I16 14I20 15I11	土師器	小甕	14.0					石・長・雲・チ・角	浅黄橙 10YR8/4	酸化					17/36			スス　体部外面 炭化物　口縁部 内外面	
16	SK16	14I15. 15I11	土師器	小甕	13.0					石・長・チ	浅黄橙 7.5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			3/36				
17	SK16	14I15. 15I6	土師器	小甕	13.0					石・長・チ・角	にぶい黄橙 10YR7/3	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			5/36				
18	SK16	14I15	土師器	小甕	14.0					石・長・チ	にぶい橙 7.5YR7/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			13/36			盛土	
19	SK16 SK33	14I15 14I15 15I11・16　14J4	土師器	小甕	9.2	6.0	8.2	89.1	65.2	石・長・チ・角	浅黄橙 7.5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	2/36	24/36	14/36		
20	SK16 SK33	14I15. 15I11 14I20 15I21	土師器	小甕		6.5				石・長・チ	にぶい橙 7.5YR7/4	酸化	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	糸切り	右		18/36			
21	SK16	14I15 14I15　15I6・11	土師器	小甕		8.0				石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	無調整			16/36			
22	SK16	15I6・11 15I6 57T	土師器	小甕		7.5				石・長・チ・角	にぶい褐 7.5YR6/3	酸化	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ		右		35/36			
23	SK16	14I15 14I19・20	土師器	小甕		7.5				石・長・雲	にぶい橙 7.5YR7/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右		18/36			
24	SK33	14I15	須恵器	無台杯	10.5	7.6	3.1	29.5	72.4	石・長	オリーブ灰 2.5GY6/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	左	4/36	11/36	10/36		佐渡
25	SK16 SK33	14I10・15・17. 15I6・11 14I15・20 14J4・4一括	土師器	長甕	19.0					石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/4	酸化	カキメ・ケズリ・タタキメ・ハケメ	あて具痕・カキメ・タタキメ・ハケメ			22/36				
26	SK33	14I15	土師器	長甕	20.0					石・長・チ・焼	灰白 10YR8/2	酸化	カキメ	ロクロナデ			5/36				
27	SK33	14I15・20 14I23・25	土師器	長甕	21.0					石・長・焼	浅黄橙 7.5YR8/3	酸化	カキメ・ケズリ・タタキメ・ハケメ	あて具痕・カキメ			8/36				

No.	出土位置 遺構名	出土位置 グリッド	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	径高指数	底径指数	胎土	色調	焼成	手法 外面	手法 内面	手法 底部	手法 回転方向	遺存率 口縁部	遺存率 底部	遺存率 全体	備考	
28	SK16 SK33	14I15 14I15 14I15・17 15I7	土師器	長甕	18.0					石・長・チ・焼・角・海	浅黄橙 10YR8/3	酸化	カキメ	カキメ・ハケメ			9/36				
29	SK16 SK33	14I15 14I15 15I20・22	土師器	長甕						石・長・雲・角	灰白 10YR8/2	酸化	平行タタキメ・ケズリ	同心円あて具痕・ハケメ							
30	SK33	14I15	土師器	長甕						石・長・雲・チ	灰白 10YR8/2	酸化	平行タタキメ	平行あて具痕							
31	SK33	14I15・20	土師器	小甕	12.0					石・長・雲・チ・焼・角	にぶい橙 7.5YR6/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			6/36			スス・炭化物 口縁部内外面	
32	SK33	14I15	土師器	小甕	14.0	7.0	14.0	100.0	50.0	石・長・チ・角	にぶい黄 2.5Y6/3	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		左	8/36	36/36	6/36	スス 体部外面 炭化物 口縁部内面	
33	SK27	14G15 15F16	土師器	長甕	23.0					石・長・チ・白・角	にぶい黄橙 10YR7/2	酸化	ハケメ・ケズリ	ハケメ			3/36				
34	SK27	14G15	土師器	長甕						石・長・チ・角	褐灰 10YR6/1	酸化	タタキメ	同心円あて具痕・ナデ							
35	SK32	15I16 14J4・5 14I25	土師器	小甕	12.5	6.4	9.5	76.0	51.2	石・長	にぶい橙 5YR7/4	酸化	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	糸切り	右	2/36	29/36	4/36		
36	SK10 SK32	15J1 15I16 15I21・23	土師器	長甕						石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/4	酸化	タタキメ	同心円あて具痕・ハケメ							
37		14J4	須恵器	無台杯	11.6	7.0	3.3	28.4	60.3	石・長・チ	灰白 5Y8/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		7/36	2/36	12/36		新津
38		14J3	須恵器	無台杯	12.0	7.0	3.4	28.3	58.3	石・長・白	灰 N6/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	4/36	7/36	4/36		佐渡?
39		14J5・10一括	須恵器	無台杯	11.5	8.2	3.4	29.6	71.3	石・長	灰 N6/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		1/36	7/36	4/36		佐渡
40		55T	須恵器	無台杯	12.0	8.5	2.9	24.2	70.8	石・長	灰白 10Y7/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		6/36	11/36	5/36		佐渡
41		14J5・5一括	須恵器	無台杯	12.0	8.0	3.0	25.0	66.7	石・長・白	オリーブ灰 2.5GY6/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	6/36	11/36	4/36		佐渡
42		14I20	須恵器	無台杯	12.0	8.4	3.0	25.0	70.0	石・長	灰 7.5Y6/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	左	25/36	30/36	27/36		佐渡
43		15G6	須恵器	無台杯	13.0					長・白	灰 5Y5/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36				
44		20J1一括	須恵器	坏蓋杯?	13.1	7.0	4.7	35.9	53.4	石・長・チ・焼	浅黄橙 7.5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	25/36	18/36	22/36	スス 高台外面 体部外面下部	新津
45		20I21	須恵器	無台杯	12.0	8.5	3.1	25.8	70.8	石・長・白	灰 7.5Y6/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		7/36	16/36	11/36	墨書「福」 底部外面	佐渡
46		14I21	須恵器	杯蓋	14.0					石・長	灰白 N7/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ		左	6/36				佐渡
47		16I22	土師器	無台椀	13.5	5.5	4.1	30.4	40.7	石・長・チ	橙 2.5YR6/6	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			7/36	35/36	13/36		
48		14J10 15I17・25 15J4・5・7	土師器	無台椀	16.9	7.0	4.7	27.8	41.4	石・長・チ・焼	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ・ミガキ・ケズリ	ロクロナデ・ミガキ			4/36	18/36	12/36		
49		15G12	須恵器	長頸壺						長・白	灰 7.5Y6/1	還元	ロクロナデ	ロクロナデ							
50		14I25	土師器	長甕	(20.0)					石・長・チ・角・海	にぶい黄橙 10YR7/2	酸化	カキメ	カキメ			1/36				
51		14J4	土師器	長甕	(20.0)					石・長・チ	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ	カキメ			1/36				
52		15I12・17	土師器	長甕	(20.0)					石・長・チ・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ	カキメ			2/36				
53		16I22 16J2	土師器	長甕	18.0					石・長・雲・チ・角	淡黄 2.5Y8/3	酸化	カキメ	カキメ			10/36			スス 体部外面	
54		19I20	土師器	長甕	(21.0)					石・長・雲・チ・角	淡黄 2.5Y8/3	酸化	カキメ	ロクロナデ			2/36				
55		20I23	土師器	長甕	(24.5)					石・長・雲・チ・焼・角	浅黄橙 10YR8/3	酸化	カキメ	ロクロナデ			1/36				
56		17F1	土師器	小甕	7.5	5.3	6.1	81.3	70.7	石・長・雲・チ・角	浅黄橙 7.5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			31/36	12/36	25/36	スス・炭化物 口縁部内外面・体部外面	
57		14I14	土師器	小甕	14.0					石・長・雲・チ	にぶい橙 7.5YR7/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36				
58		15J7	土師器	小甕	12.0					石・長・チ・角	橙 2.5YR7/6	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			4/36				
59		14I20	土師器	小甕		7.0				石・長	浅黄橙 10YR8/3	酸化	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	無調整	右		33/36			
60		17I18・21・22・22一括・23・23一括 17J1 19J16	土師器	鍋	37.0					石・長・雲・チ・焼・角	浅黄橙 10YR8/4	酸化	カキメ・タタキメ	カキメ・ハケメ			6/36				
61	SK8 SK16	14J4 14I15	石器	叩き石																重量 714.6g	
62	SK16	14I15	石器																	重量 132.5g	
63	試掘45T		須恵器	無台杯		7.5				石・長・白	灰 N6/0	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右		16/36			佐渡
64	試掘57T		土師器	小甕	(14.0)					石・長・焼	淡橙 5YR8/4	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			2/36				
65	試掘55T		土師器	長甕	21.8					石・長・雲・焼	にぶい橙 7.5YR7/3	酸化	カキメ	ロクロナデ			7/36				
66	試掘57T		土師器	長甕	21.0					石・長・雲・チ・焼	灰白 7.5YR8/2	酸化	カキメ	ロクロナデ			5/36				
67	試掘45T		鉄滓																		

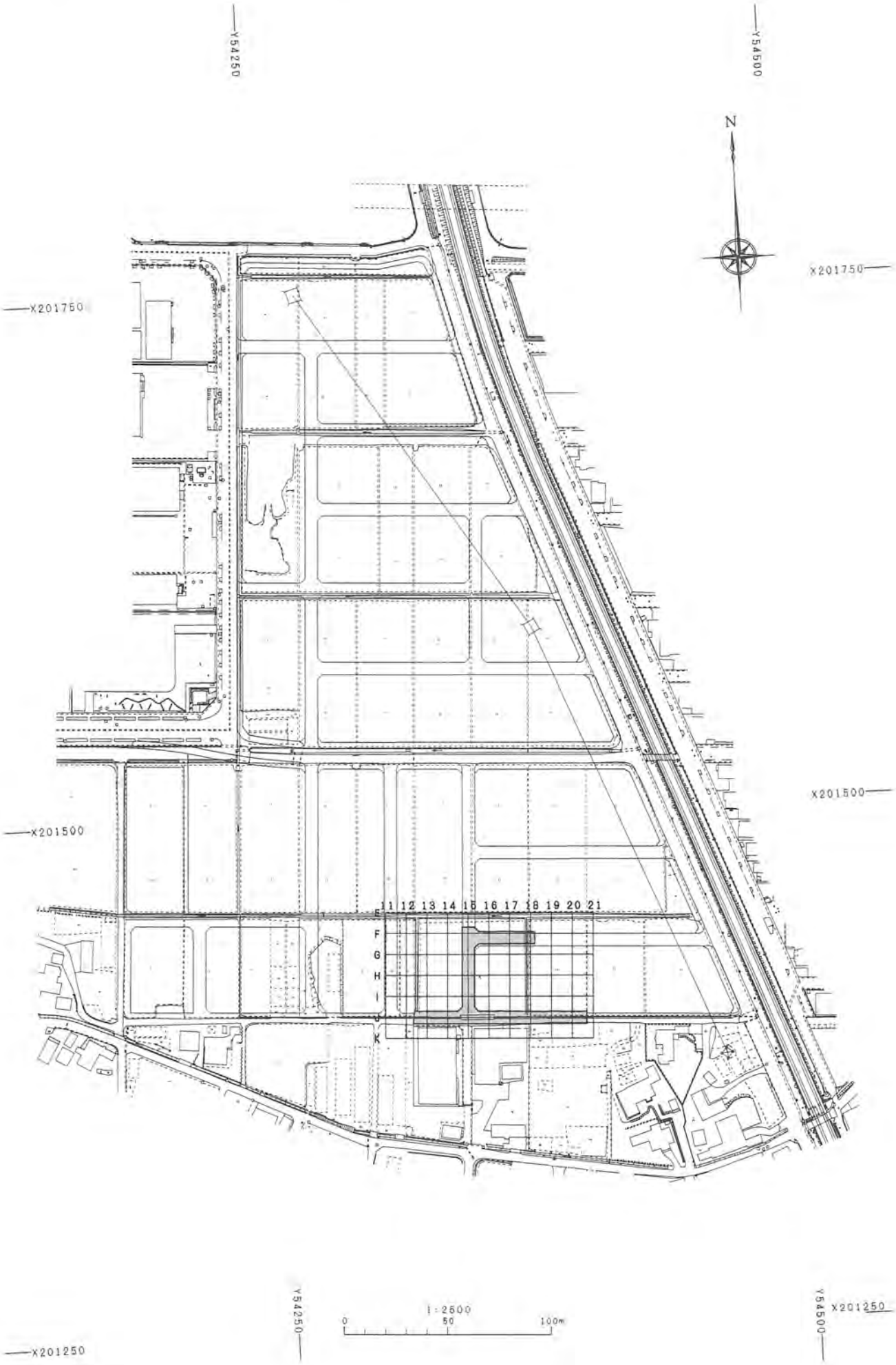


大日本帝国陸地測量部
1914年修正測図 1/25,000

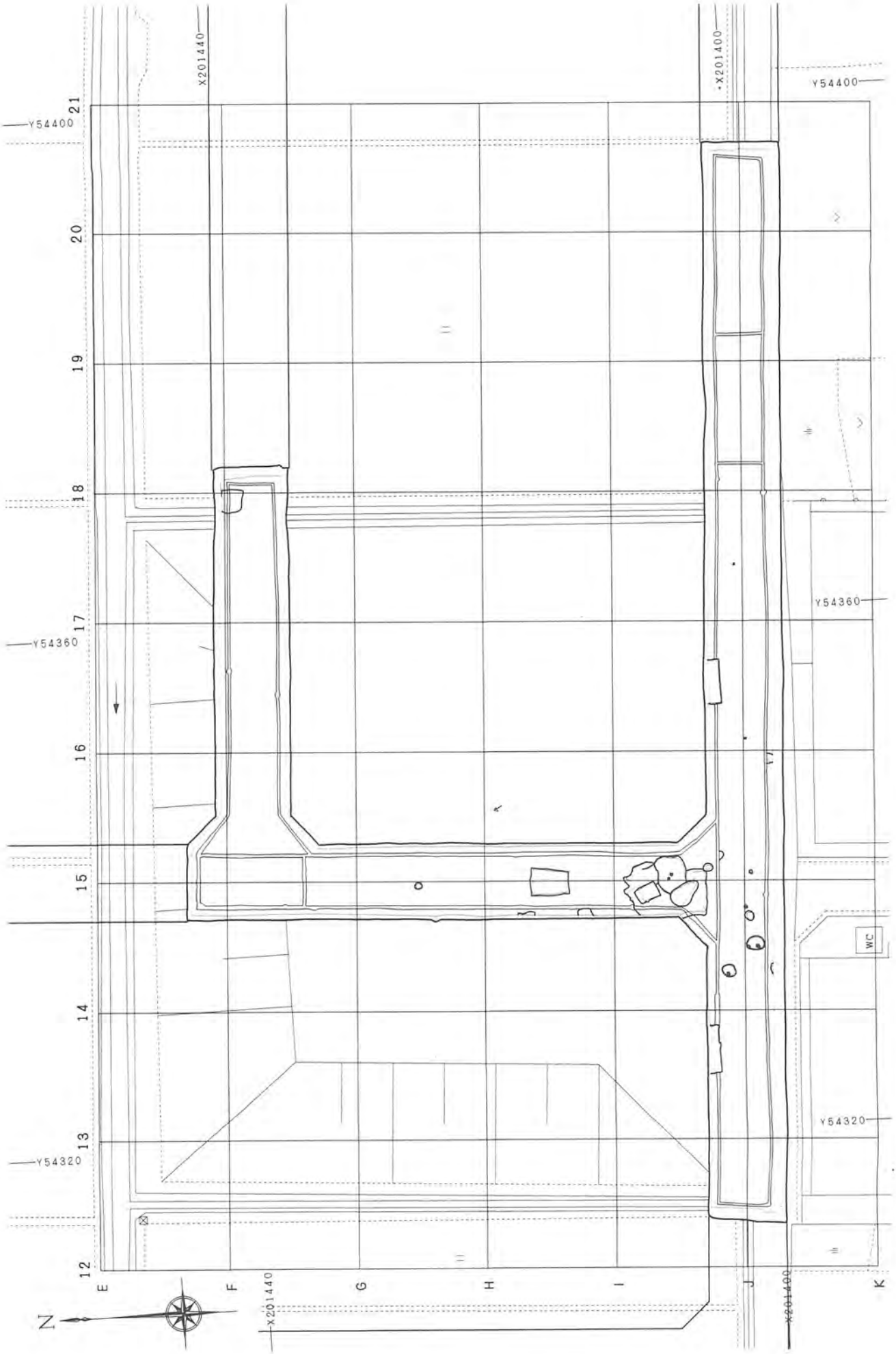

●川口乙遺跡

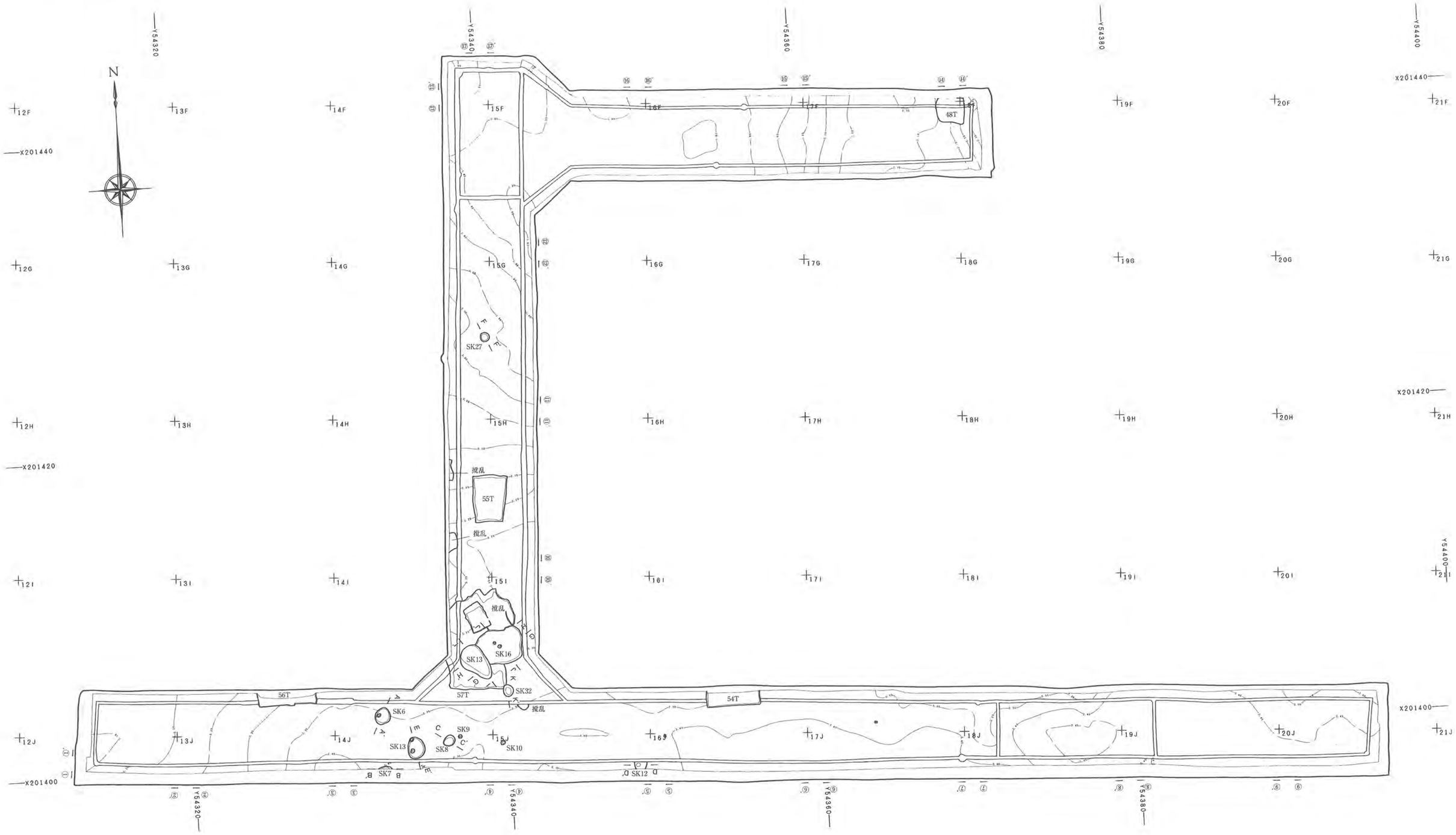
川口乙遺跡と周辺の遺跡（1/10,000）

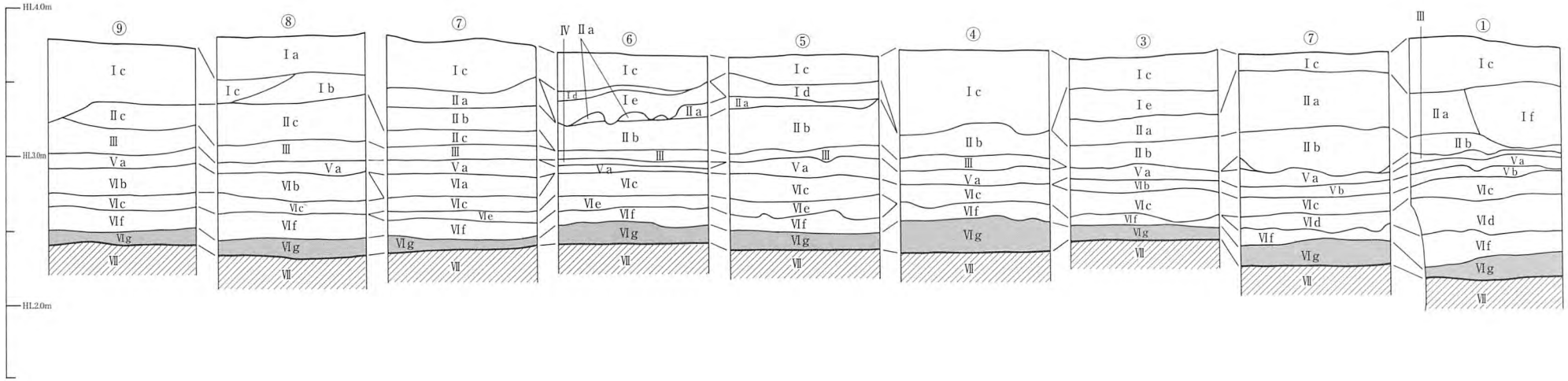
川口乙遺跡調査区とグリッド設定図（1/2,500）

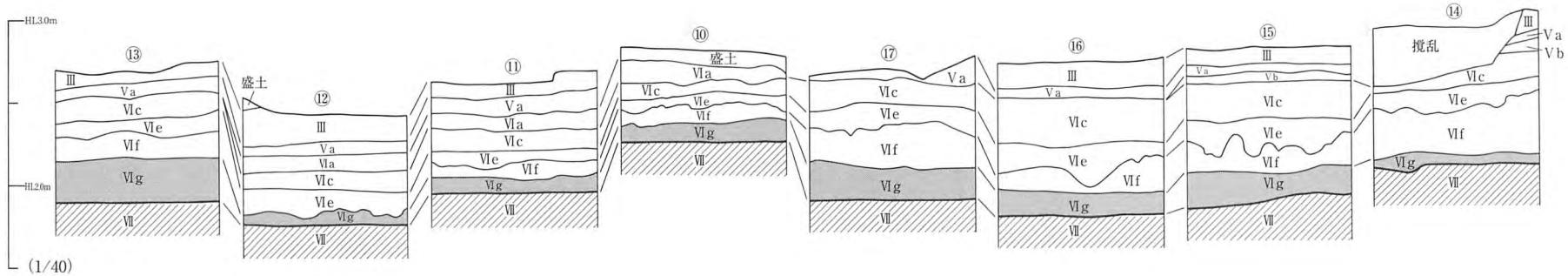


川口乙遺跡グリッド設定図（1/400）



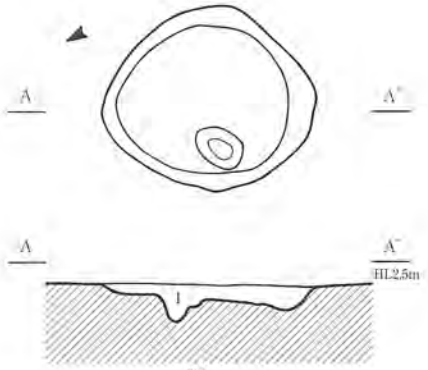

N
Y54320
Y54340
Y54360
Y54380
Y54400
X201440
X201420
X201400
12F
13F
14F
15F
16F
17F
19F
20F
21F
12G
13G
14G
15G
16G
17G
18G
19G
20G
21G
12H
13H
14H
15H
16H
17H
18H
19H
20H
21H
12I
13I
14I
15I
16I
17I
18I
19I
20I
21I
12J
13J
14J
15J
16J
17J
18J
19J
20J
21J
48T
54T
55T
56T
57T
SK27
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK12
SK13
SK16
SK32
撹乱


HL4.0m
HL3.0m
HL2.0m
⑨
⑧
⑦
⑥
⑤
④
③
⑦
①
Ⅳ Ⅱa
Ⅲ
Ⅰc
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰd
Ⅰe
Ⅰf
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Va
Vb
VIa
VIb
VIc
VId
VIe
VIf
VIg
Ⅶ


HL3.0m
HL2.0m
⑬
⑫
⑪
⑩
⑰
⑯
⑮
⑭
盛土
撹乱
Ⅲ
Va
Vb
VIa
VIc
VIe
VIf
VIg
Ⅶ

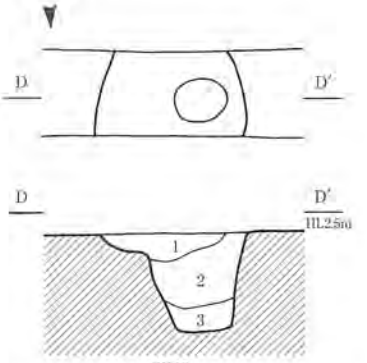
(1/40)

ＳＫ６・７・８・１２・１３・２７実測図（1/40）



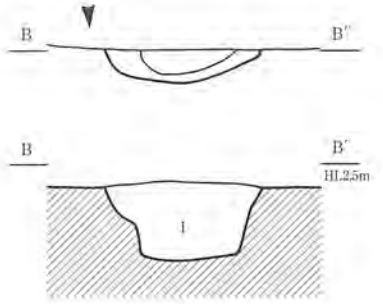
SK 6

ＳＫ６　１灰色土（7.5Ｙ4/1）粘土層。炭化物が多量に混入。腐植土が微量混入。



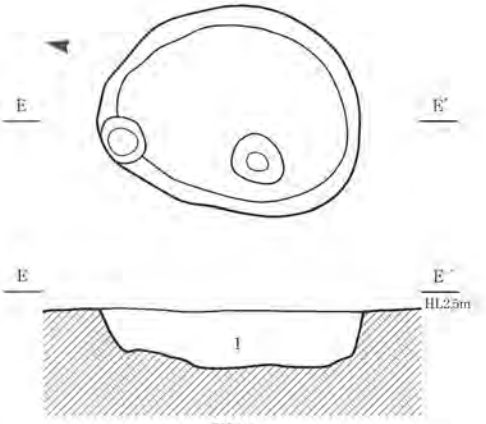
SK12

ＳＫ12　１灰色土（7.5Ｙ5/1）粘土層。大きめの炭化物が多量に混入。
２灰色土（5Ｙ5/1）シルト質粘土層。炭化物が多量に混入。
３灰色土（5Ｙ5/1）粘土層。炭化物が少量混入。



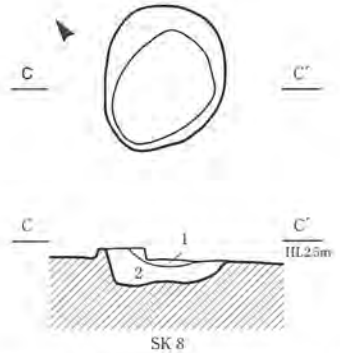
SK 7

ＳＫ７　１灰色土（10Ｙ4/1）粘土層。炭化物がごく微量混入。黒褐色粘土（10ＹＲ3/1）・
オリーブ黒色粘土（5Ｙ3/1）・灰色粘土（5Ｙ4/1）がブロック状に混入。



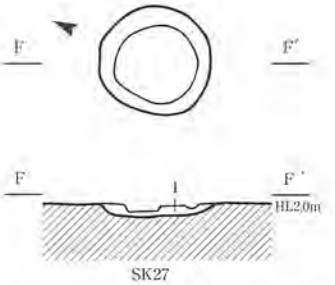
SK13

ＳＫ13　１灰色土（10Ｙ4/1）粘土層。炭化物がごく微量混入。黒褐色粘土（10ＹＲ3/1）
オリーブ黒色粘土（5Ｙ3/1）・灰色粘土（5Ｙ4/1）がブロック状に混入。



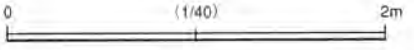
SK 8

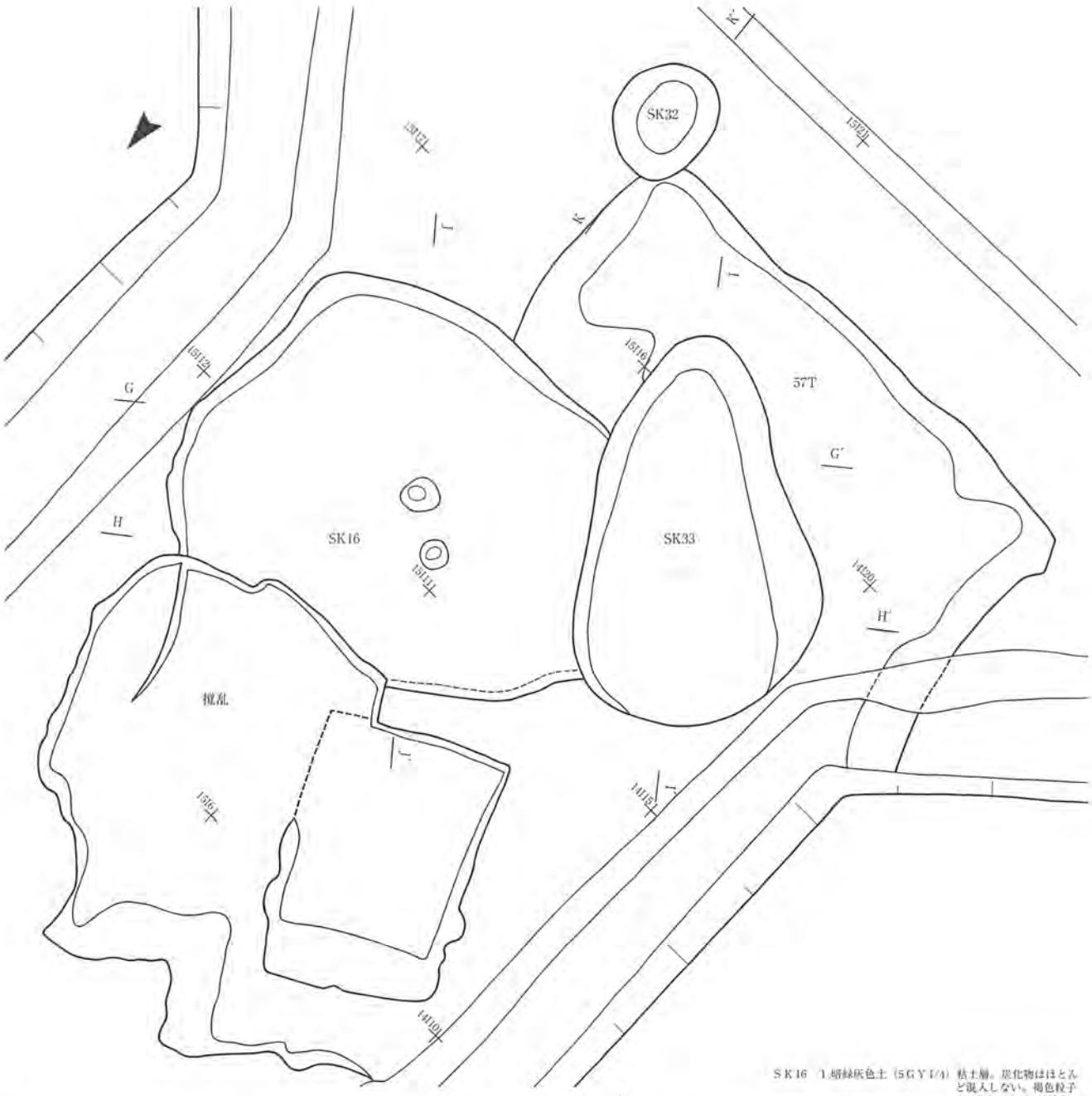
ＳＫ８　１灰色土（7.5Ｙ4/1）粘土層。炭化物がやや多く混入。遺物が混入。
２灰色土（5Ｙ4/1）粘土層。炭化物が多量に混入。遺物が混入。

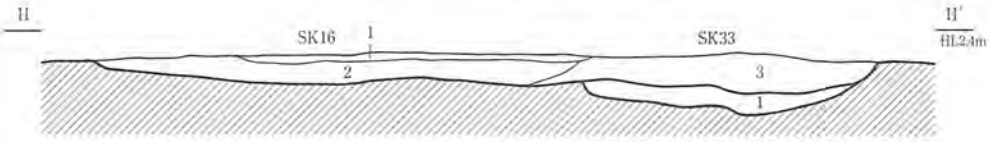


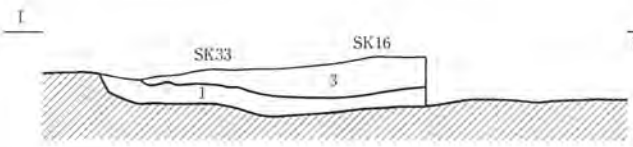
SK27

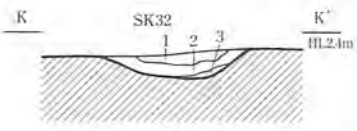
ＳＫ27　１灰色土（10Ｙ4/1）粘土層。炭化物が少量混入。遺物が混入。

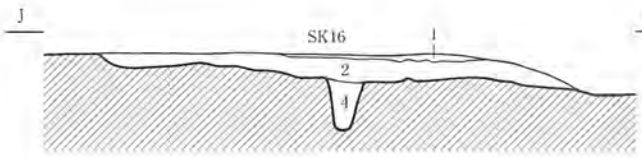












ＳＫ16　1.暗緑灰色土（5ＧＹ4/1）粘土層。炭化物はほとんど混入しない。褐色粒子（10ＹＲ4/4）が混入。
2.暗緑灰色土（5ＧＹ4/1）粘土層。炭化物が3層より多く混入。
3.暗緑灰色土（5ＧＹ4/1）粘土層。炭化物が少量混入。
4.暗緑灰色土（5ＧＹ4/1）粘土層。炭化物が少量混入。明青灰色粘土が混入。

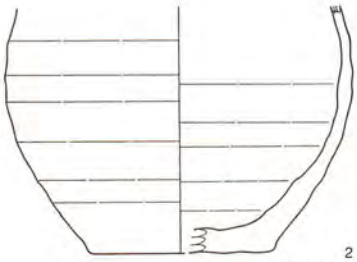
ＳＫ33　1.灰色土（10Ｙ4/1）粘土層。炭化物が多量に混入。遺物が混入。

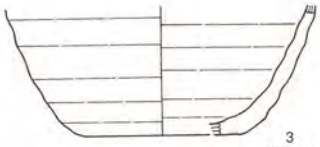
ＳＫ32　1.灰色土（5Ｙ4/1）粘土層。炭化物が少量が混入。
2.オリーブ黒色土（7.5ＧＹ3/1）粘土層。大きめの炭化物が多量に混入。
3.灰色土（7.5Ｙ5/1）粘土層。炭化物が少量混入。上部に若干砂が混入。

0　(1/40)　2m

ＳＫ８（1～3）

1
SK8.14J4


2
SK8.14J4・15I11・23


3
SK8.14J4

ＳＫ10（4）

4
SK10.15J1

ＳＫ16（5～14）

5
SK16.14I15

7
SK16.14I14　SK33.14I15

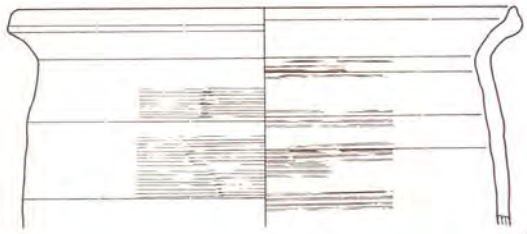
8
SK16.14I14・15
57T

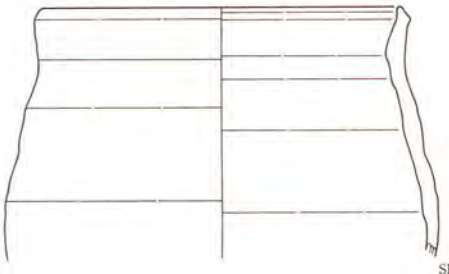
6
SK16.14I15　15J7

9
SK16.15I11

11
SK16.14I15

10
SK16.14I15

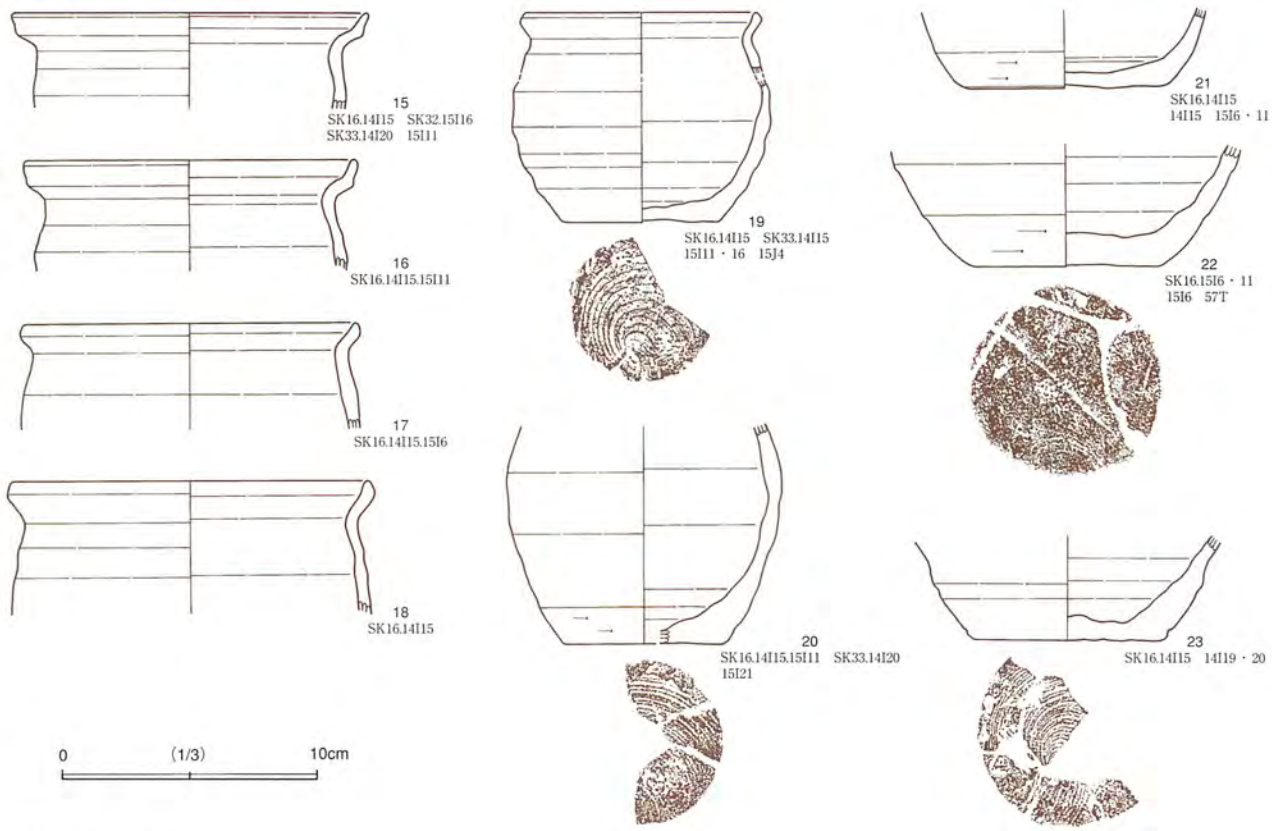

12
SK16.14I15


13
SK16.14I15

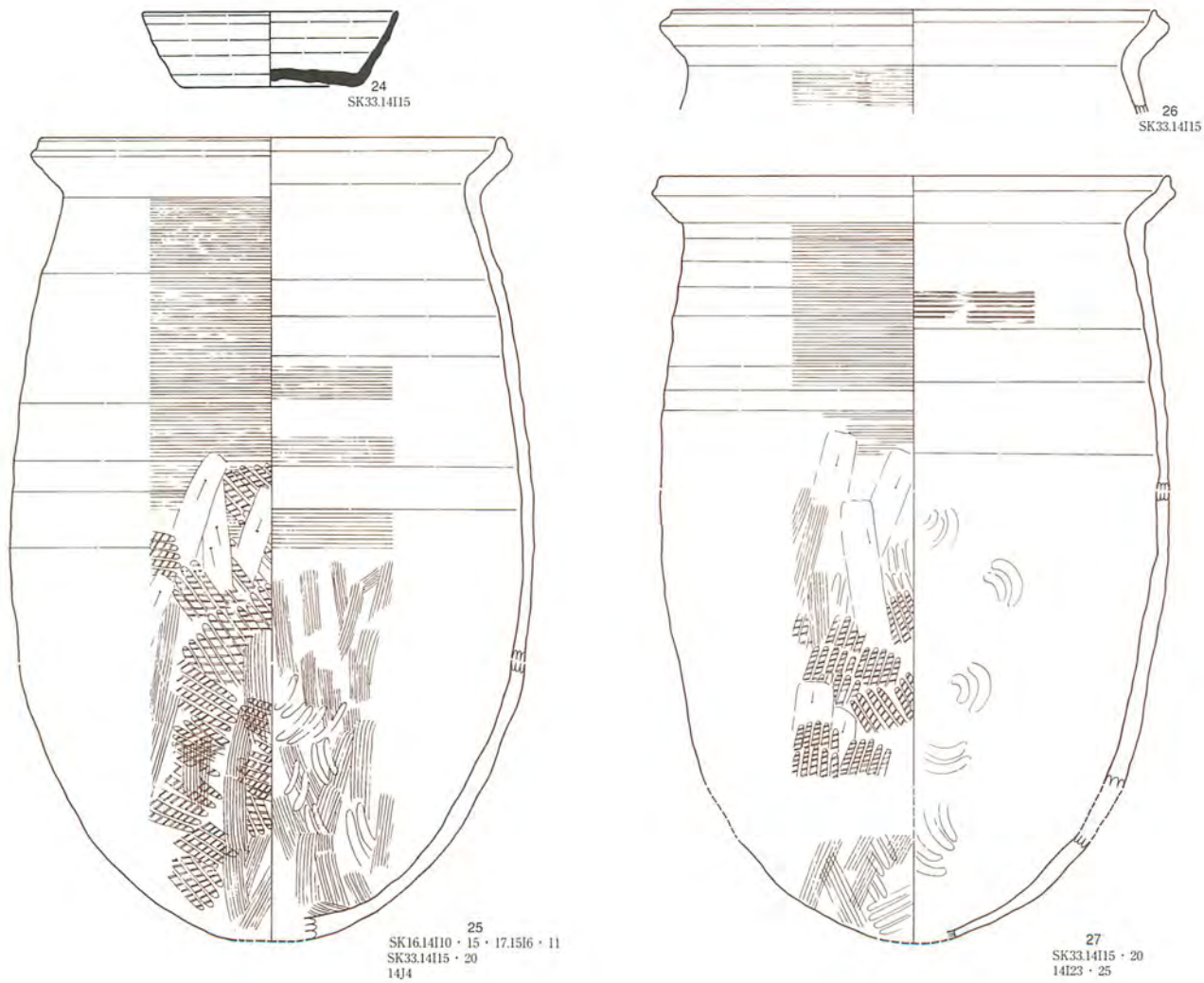
14
SK16.14I15　SK33.14I15
16I25　14J4・5

0　(1/3)　10cm

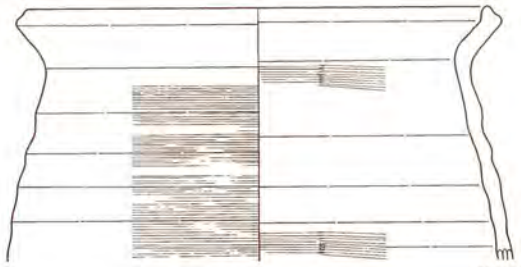
ＳＫ１６（15～23）



ＳＫ３３（24～27）

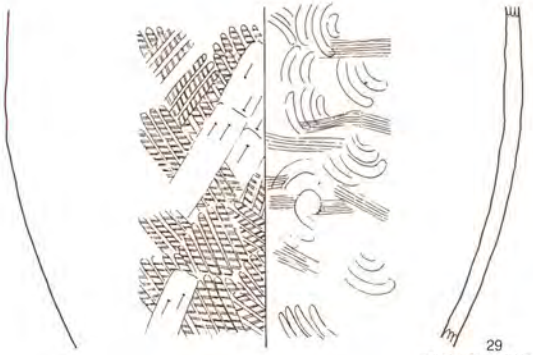


ＳＫ33（28～32）

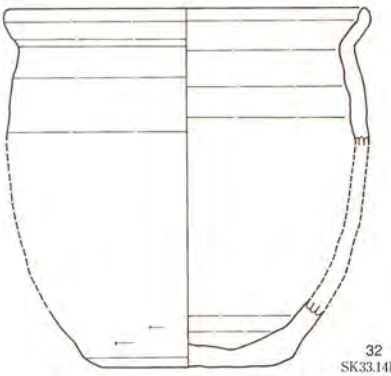


28
SK16.14I15　SK33.14I15
14I15・17　15I7

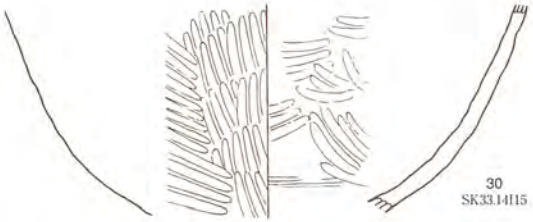
31
SK33.14I15・20



29
SK16.14I15　SK33.14I15
15I20・22



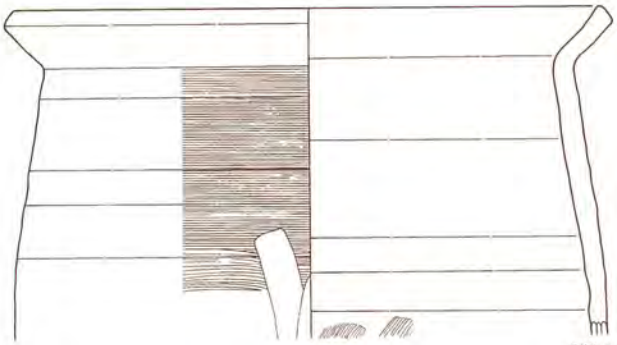
32
SK33.14I15



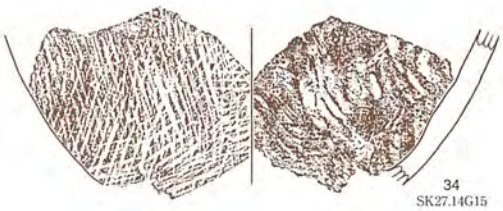
30
SK33.14I15

0　(1/3)　10cm

ＳＫ27（33～34）

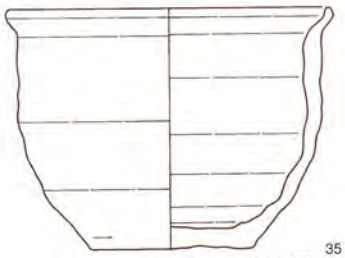


33
SK27.14G15　15F16



34
SK27.14G15

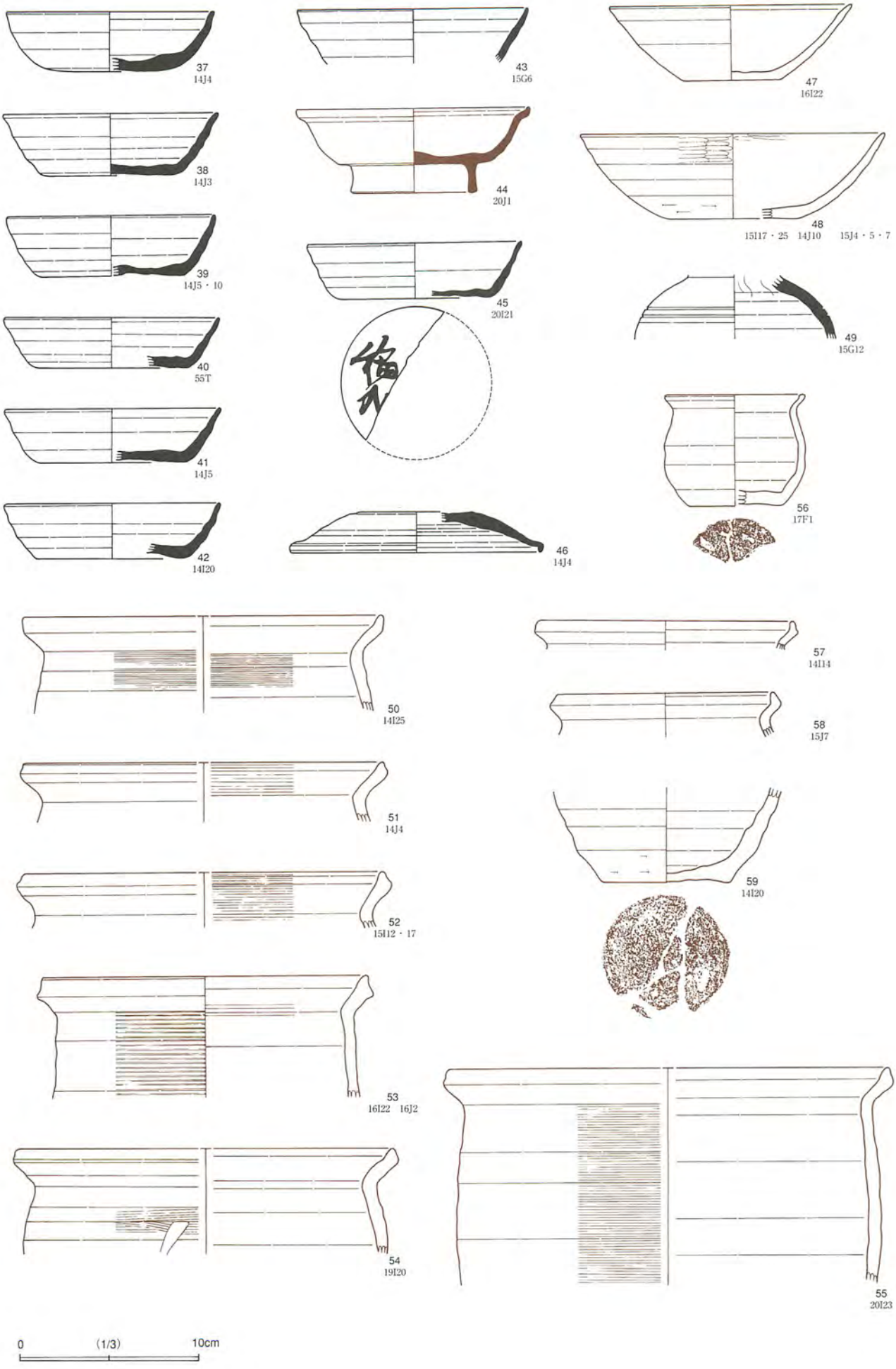
ＳＫ32（35・36）



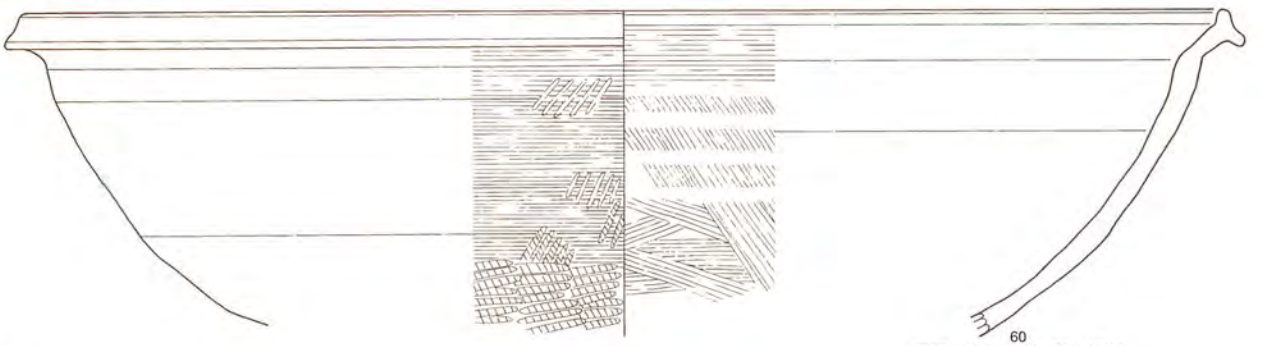
35
SK32.15I16　14J4・5・25

36
SK10.15J1　SK32.15I16　.15I21・23

包含層（37～59）

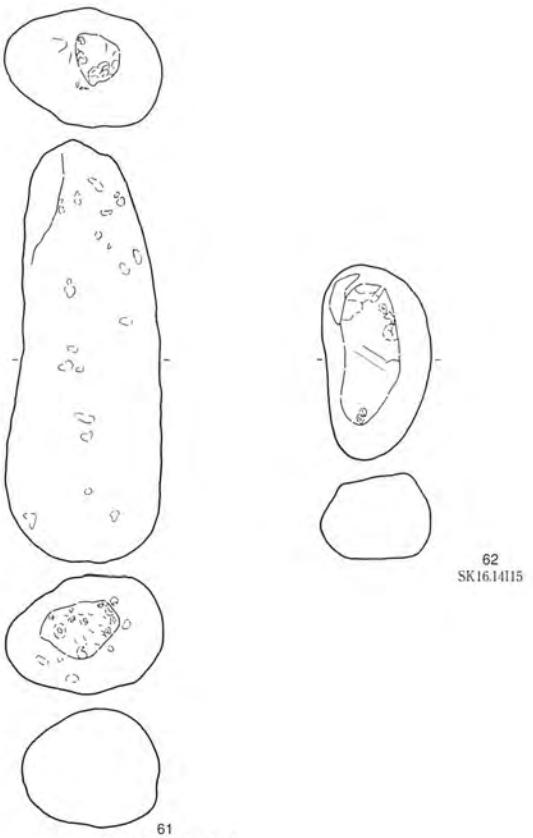

37
14J4
38
14J3
39
14J5・10
40
55T
41
14J5
42
14I20
43
15G6
44
20J1
45
20I21
46
14J4
47
16I22
48
15I17・25　14J10　15J4・5・7
49
15G12
56
17F1
50
14I25
51
14J4
52
15I12・17
53
16I22　16J2
54
19I20
57
14I14
58
15J7
59
14I20
55
20I23
0　(1/3)　10cm

包含層（60）



60
17I18・21・22・23　17J1　19J16

石製品（61・62）

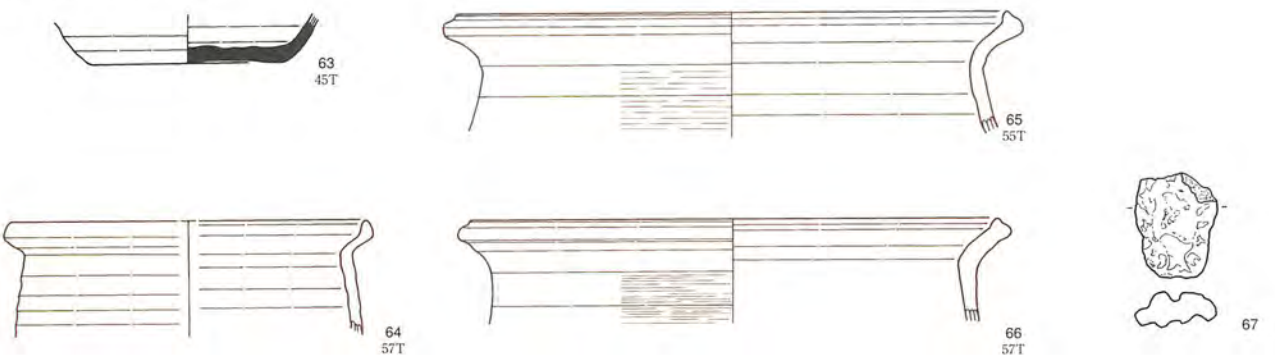


62
SK16.14I15

61
SK48.SK16.14I15　14J4

0　(1/3)　10cm

試掘・確認調査（63～67）



63
45T

65
55T

64
57T

66
57T

67

（国土地理院　1948年3月撮影）

川口乙遺跡

1　空中写真（全景）

2　空中写真（西から）

1　空中写真（北から）

2　遺跡全景（南西から）

1　調査区南側（西から）

2　ＳＫ16・32・33（南から）

1　基本層序②

2　ＳＫ16・33土層断面（北西から）

1　調査前近景（北東から）

2　調査前近景（東から）

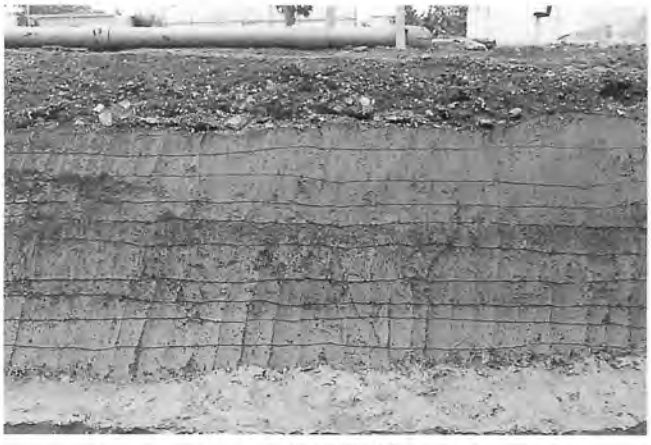
1　空中写真（北から）

2　空中写真（全景）

1　基本層序①

2　基本層序⑥

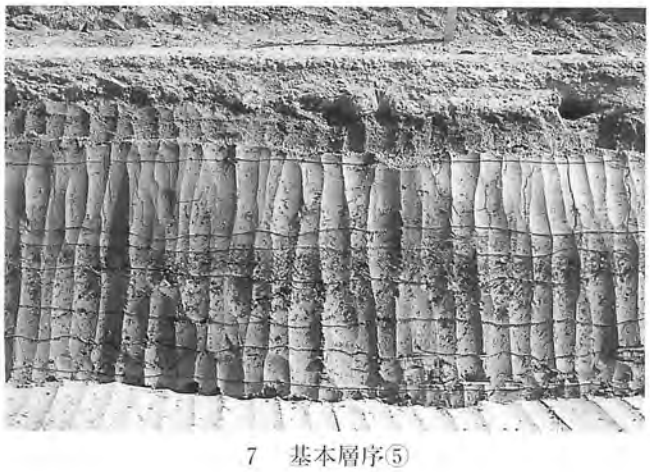
3　基本層序③



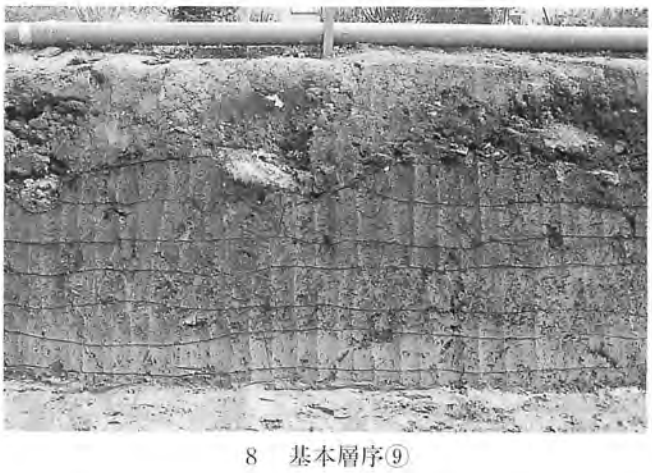
4　基本層序⑦

5　基本層序④

6　基本層序⑧

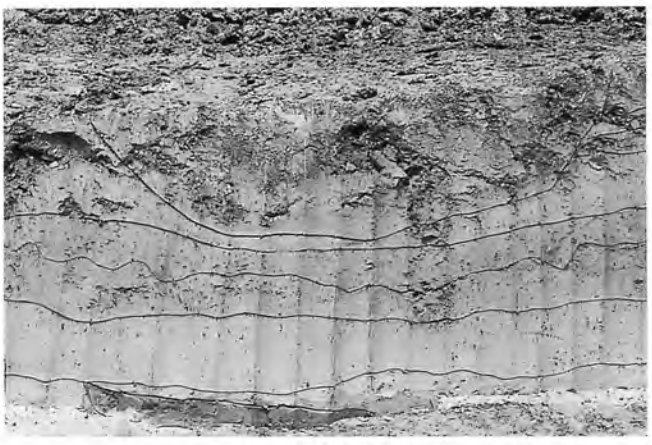


7　基本層序⑤

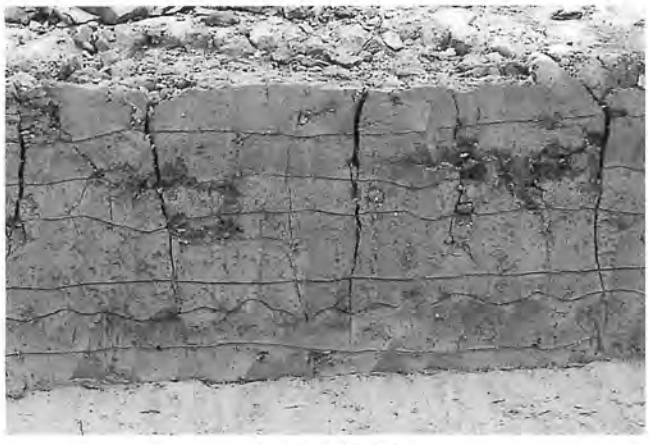


8　基本層序⑨

1　基本層序⑩

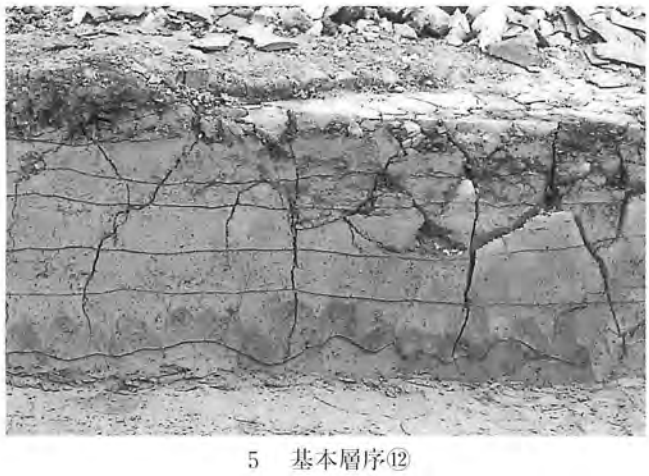


2　基本層序⑭

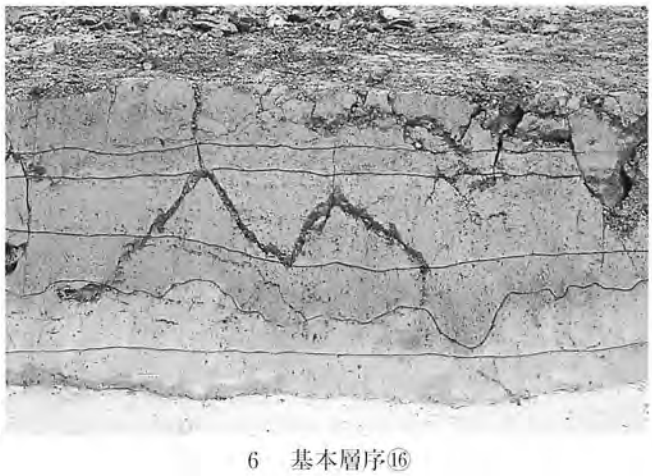


3　基本層序⑪

4　基本層序⑮



5　基本層序⑫

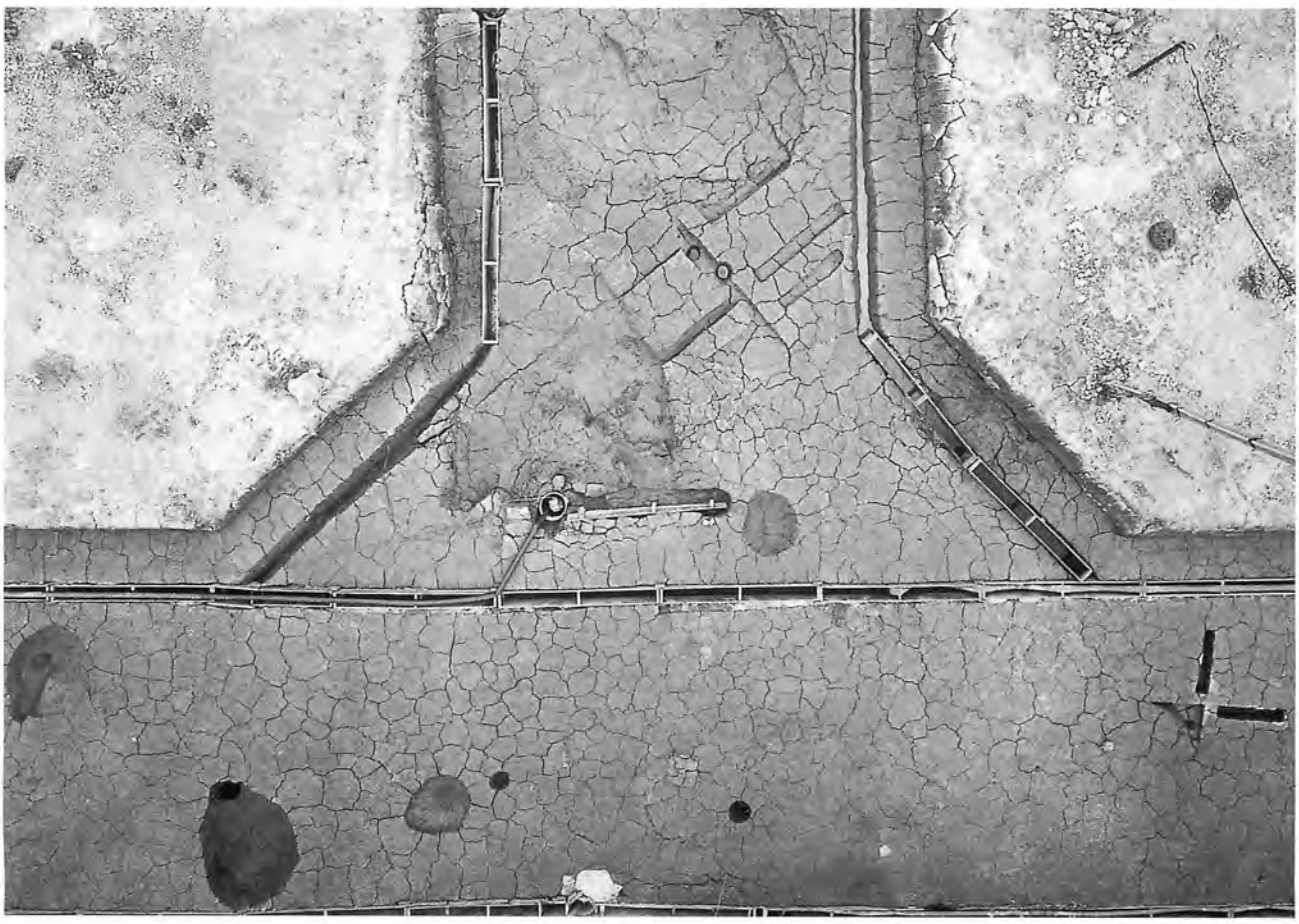


6　基本層序⑯

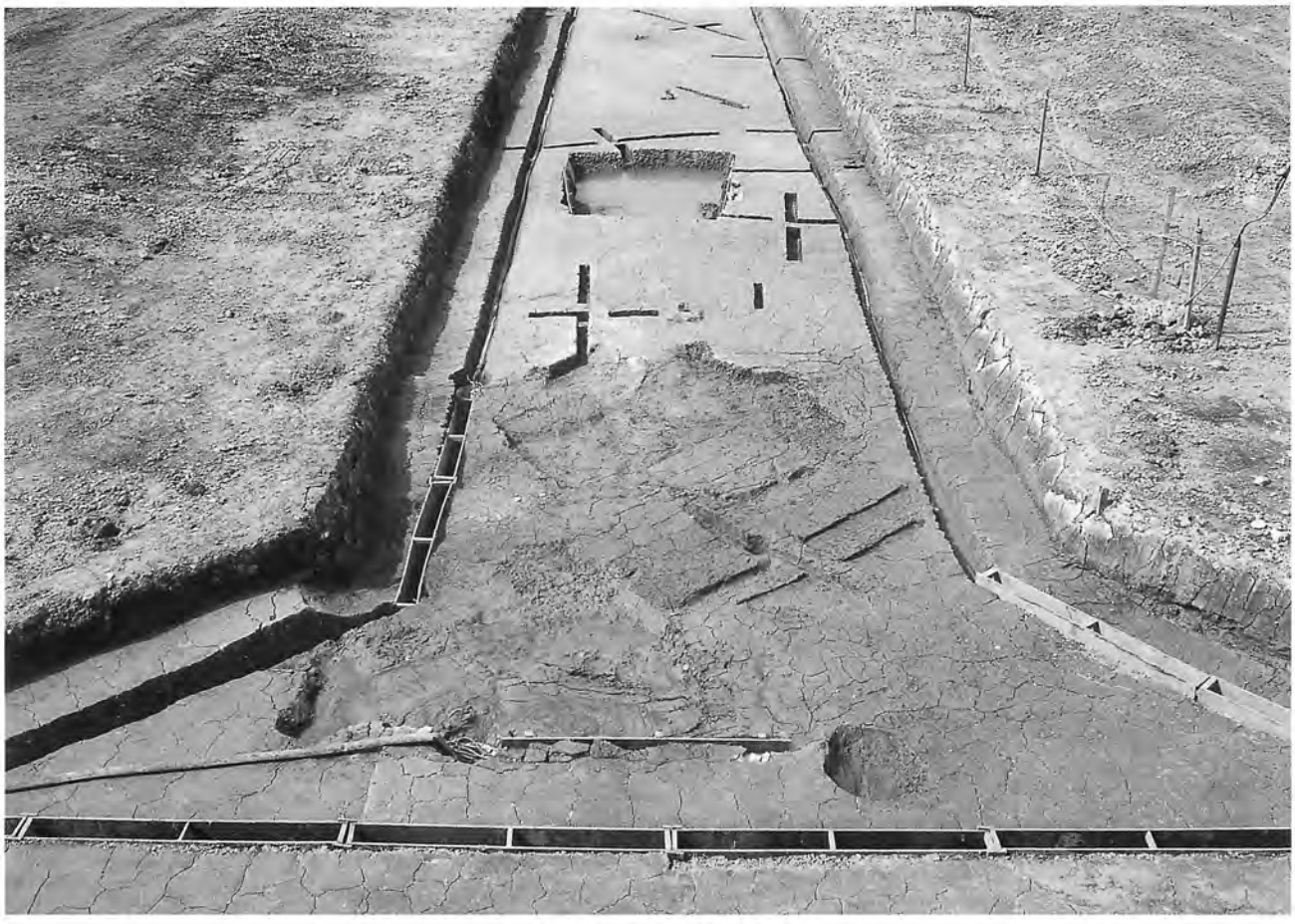
7　基本層序⑬

8　基本層序⑰

1　遺跡全景（南西から）



2　空中写真（西側）



1　ＳＫ 16・32・33（西から）

2　ＳＫ 33遺物出土状況

1　ＳＫ 16土層断面（南西から）

2　ＳＫ 16・33土層断面（北西から）

1　ＳＫ６（北西から）

2　ＳＫ12（北から）

3　ＳＫ６土層断面（北西から）

4　ＳＫ12土層断面（北から）

5　ＳＫ８（南から）

6　ＳＫ13（西から）

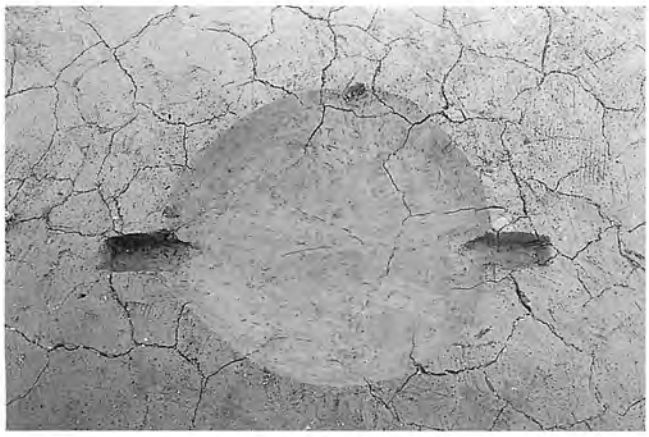
7　ＳＫ８土層断面（南から）

8　ＳＫ13土層断面（西から）

1　ＳＫ 27（南西から）

2　ＳＫ７土層断面（北から）

3　ＳＫ 32（西から）



4　ＳＫ 27（南西から）

5　ＳＫ 32土層断面（西から）

1（1）

7（6）

8（7）

15（2）

42（8）

2（3）

44（9）

47（10）

25（4）

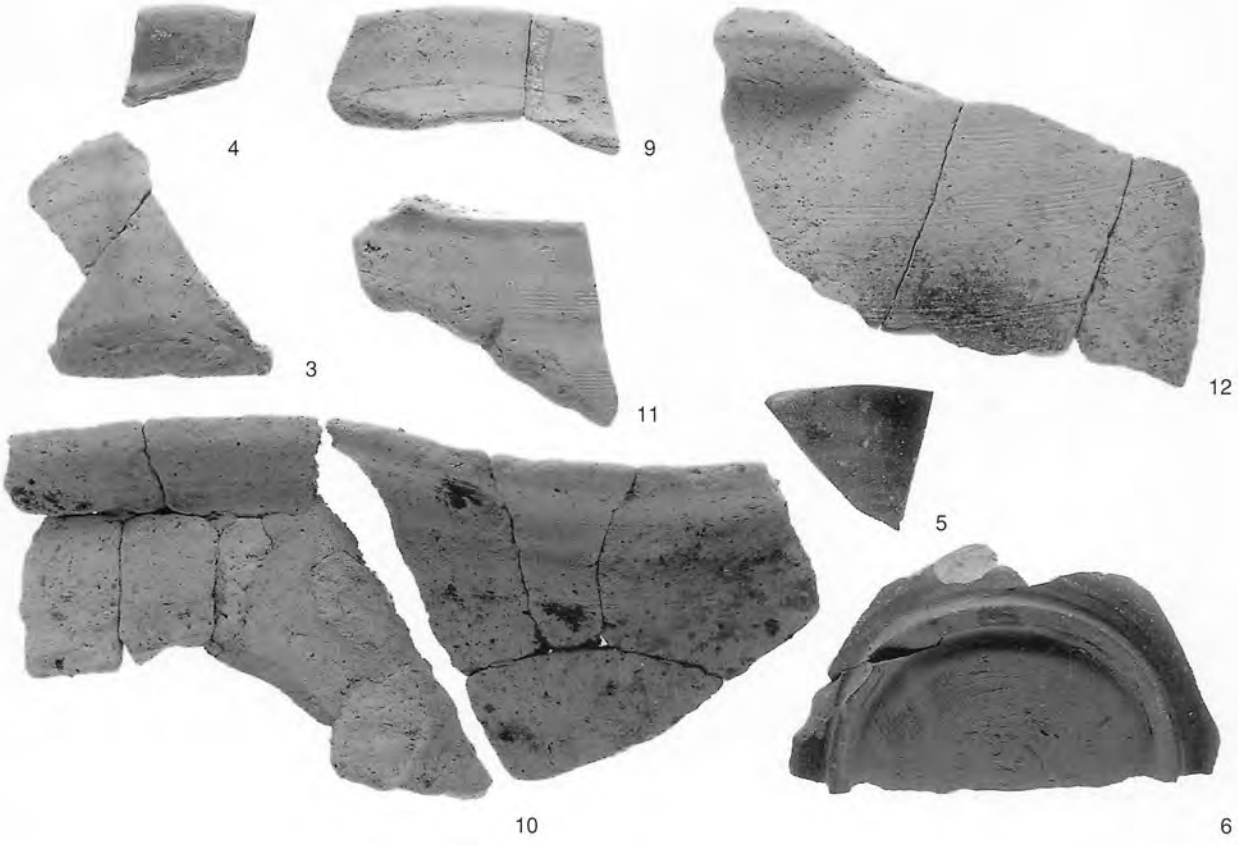
48（11）

56（12）

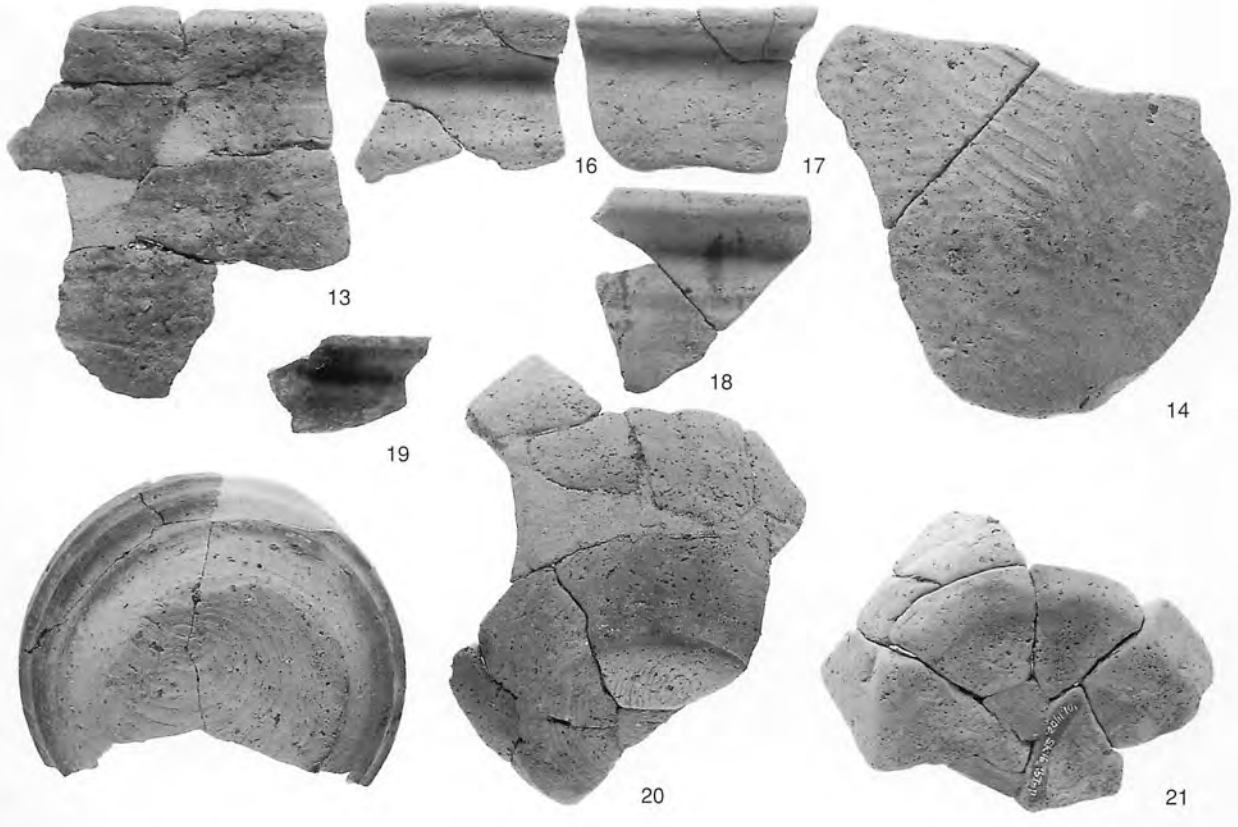
25（5）

35（13）

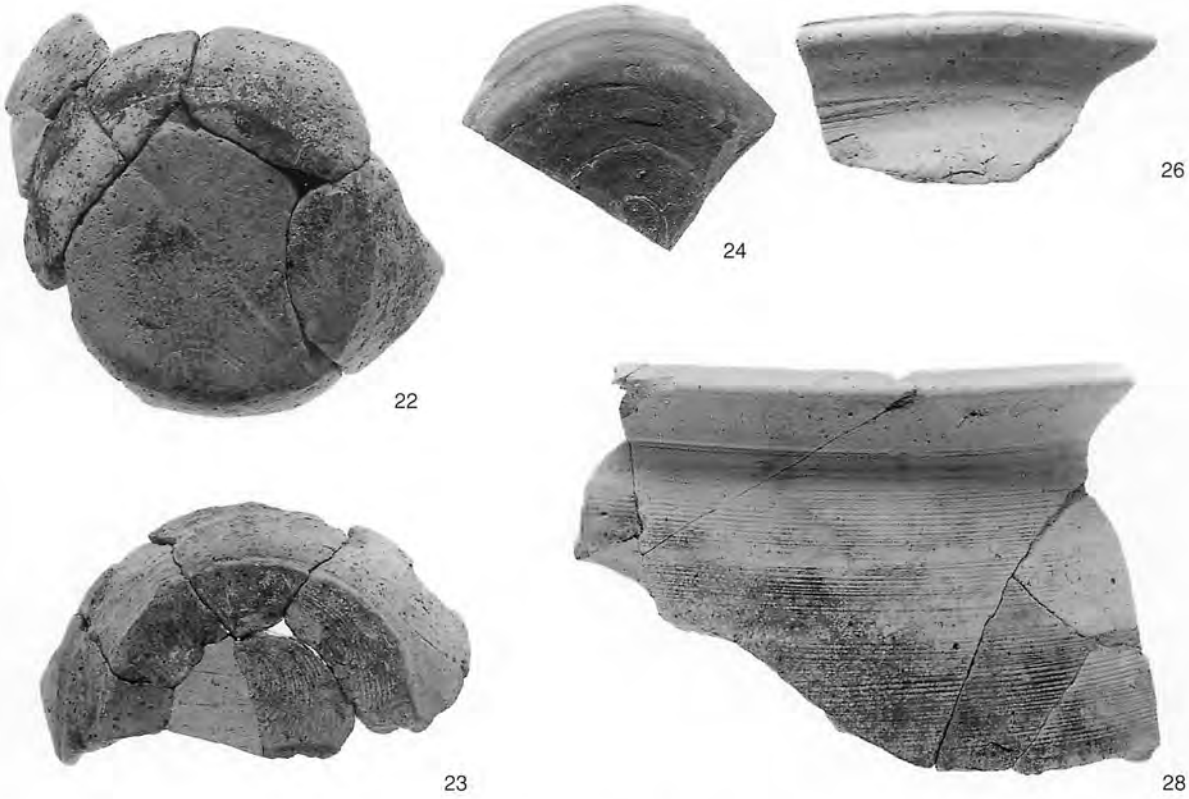
ＳＫ８（１・３）、ＳＫ16（２・６・７）、ＳＫ33（４・５）、ＳＫ32（13）、包含層（８～12）



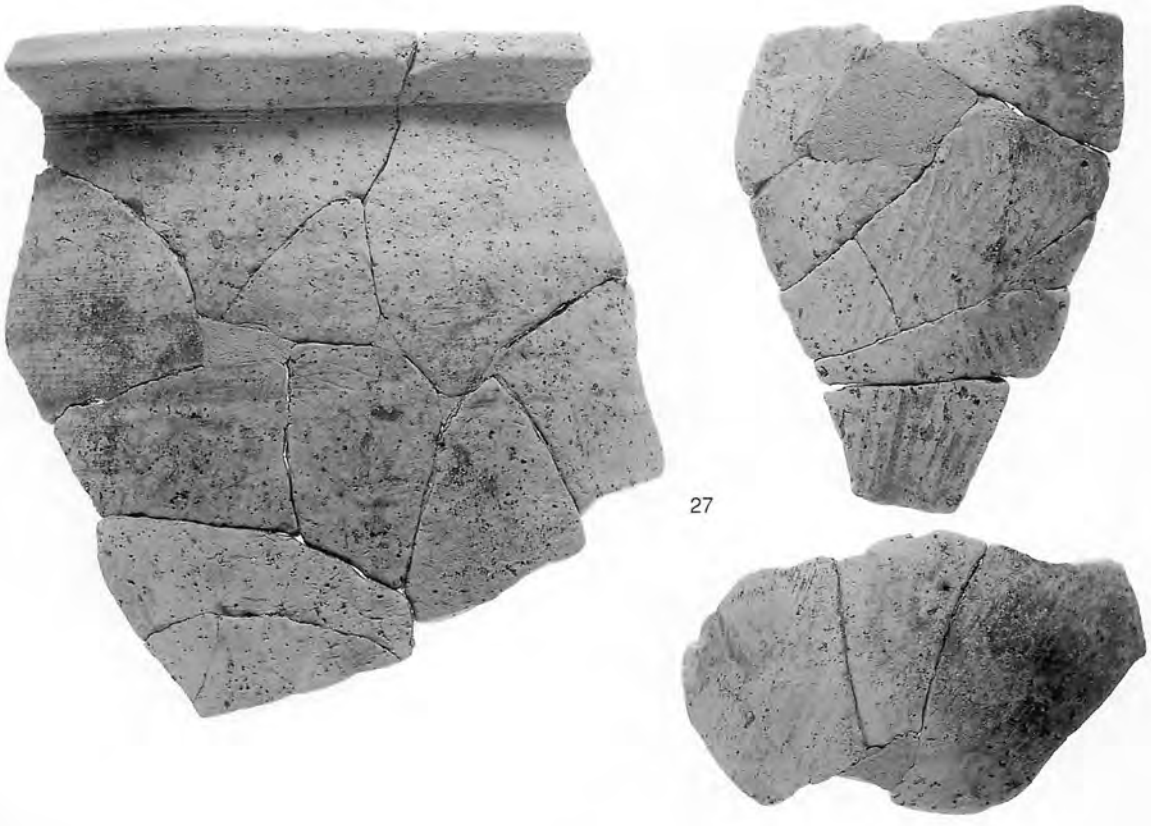
1　SK 8（3）、SK 10（4）、SK 16（5・6・9～12）



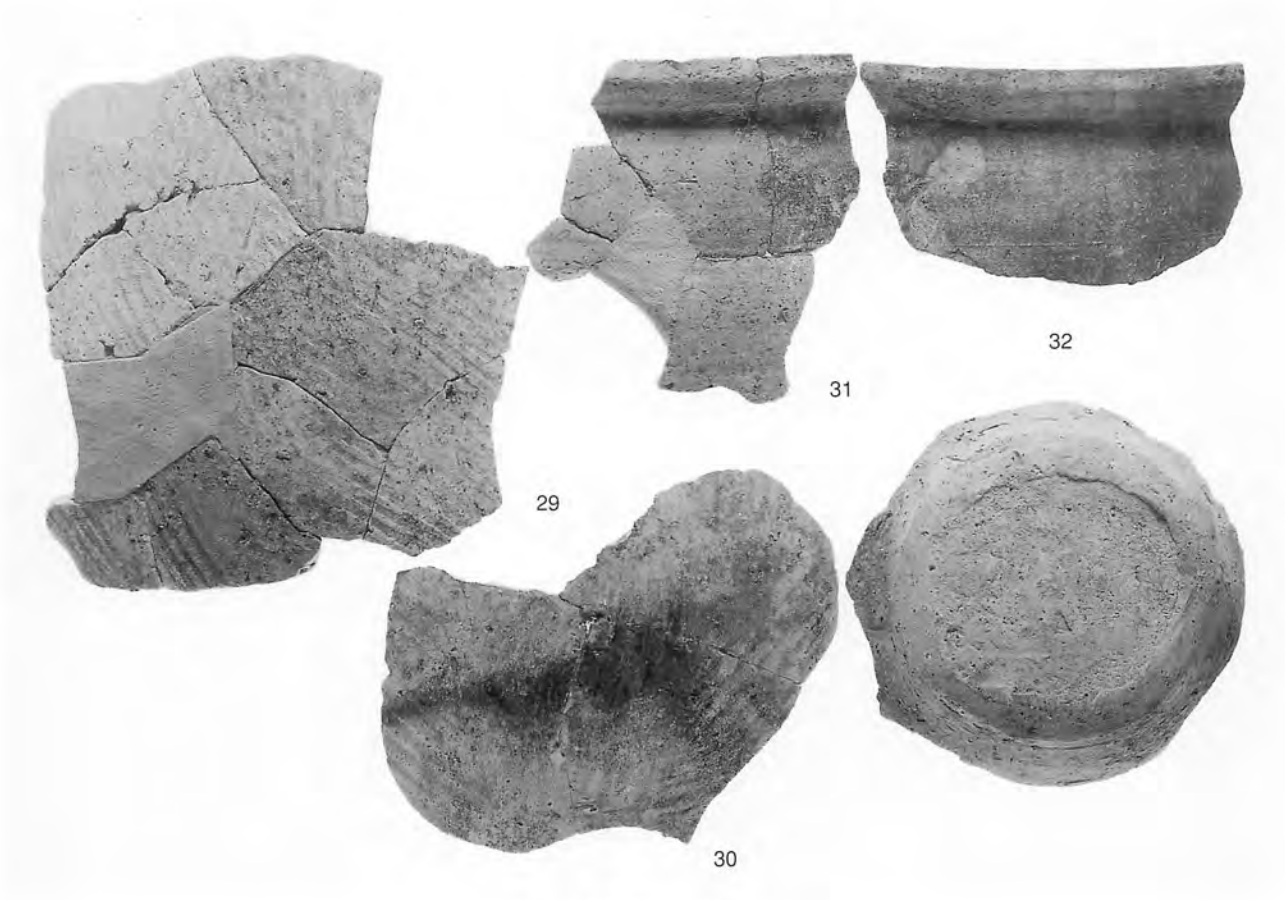
2　SK 16（13・14・16～21）



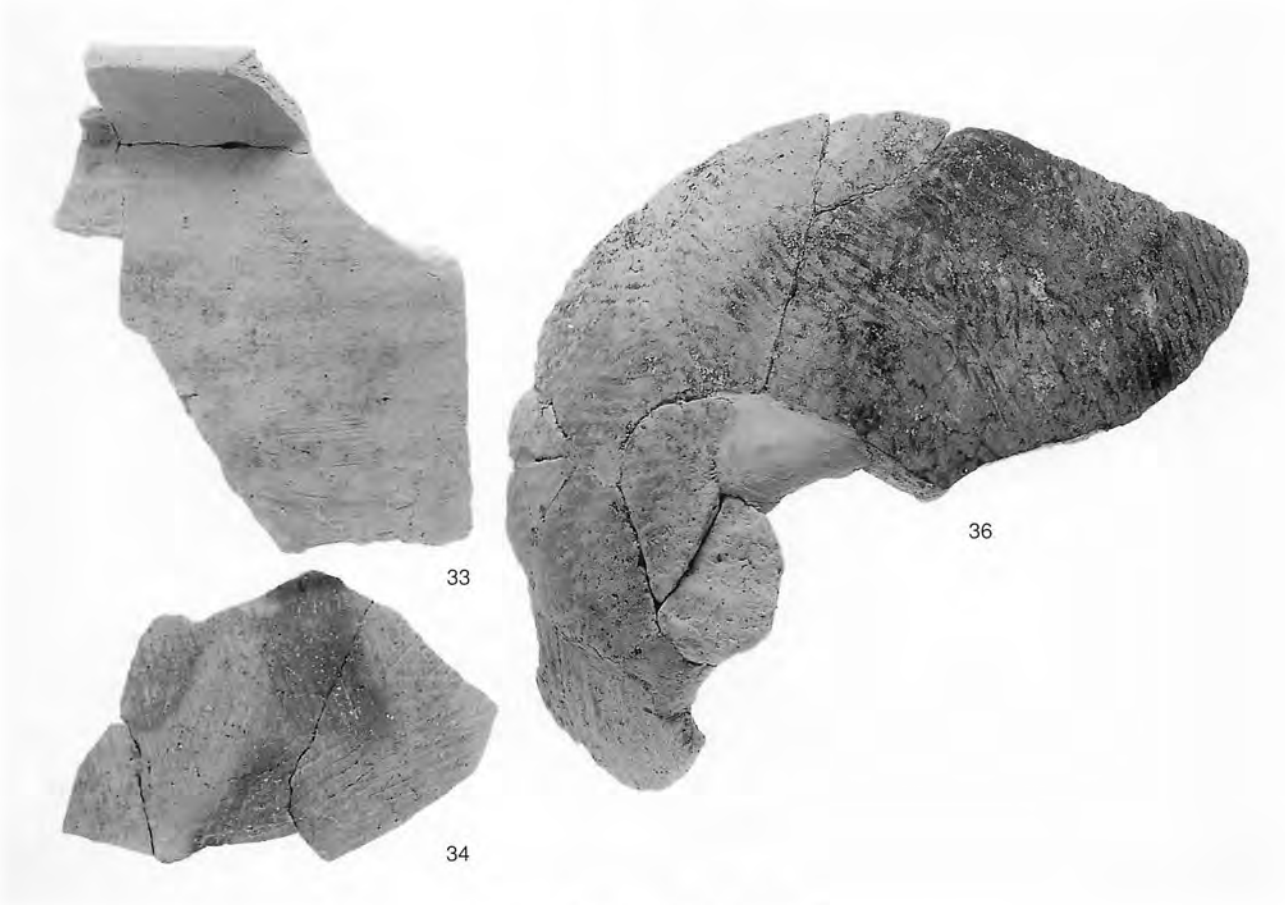
1　S K 33（22～24・26・28）



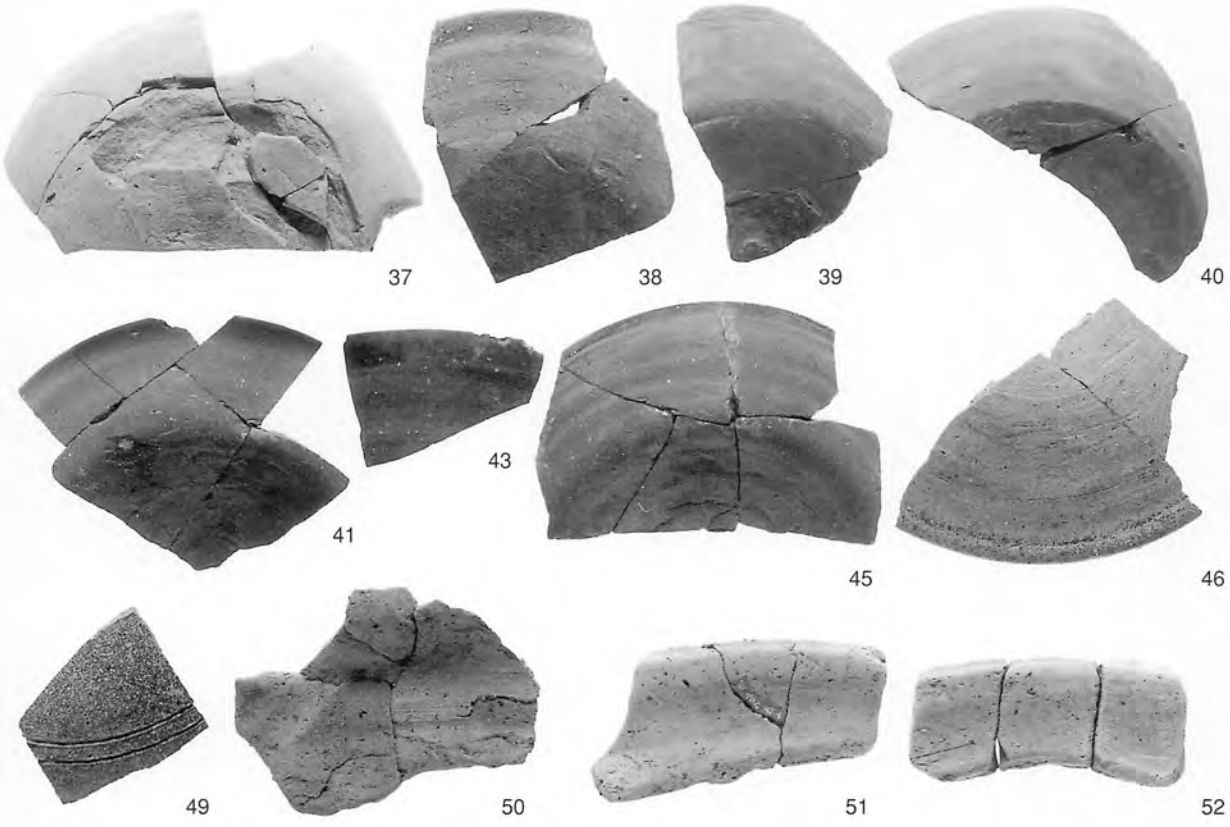
2　S K 33（27）



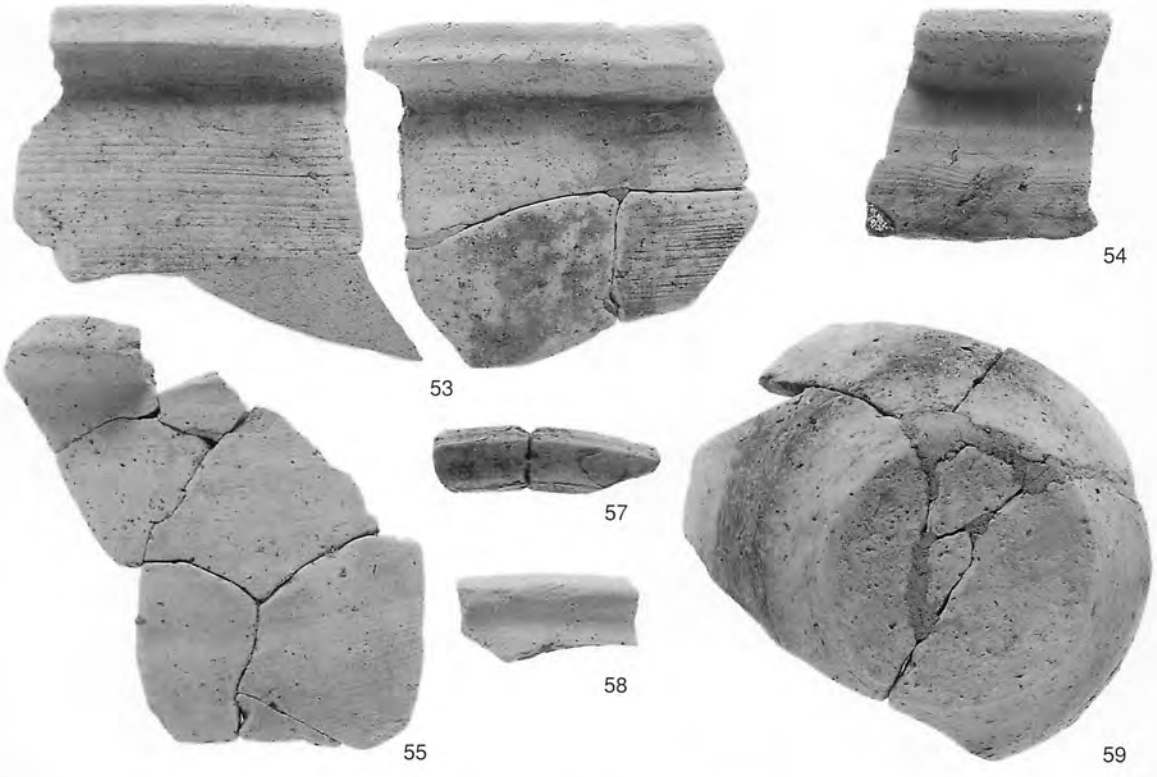
1　ＳＫ 33（29～32）



2　ＳＫ 27（33・34）、ＳＫ 32（36）



1　包含層（37～41・43・45・46・49～52）

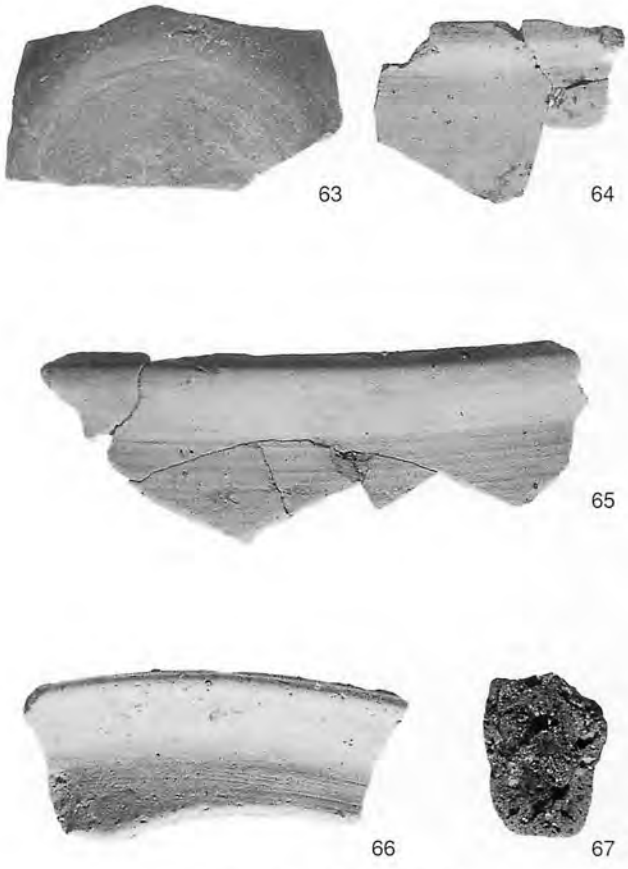


2　包含層（53～55・57～59）

60

1　包含層（60）

2　包含層（61表・62表）



63　64　65　66　67

3　試掘・確認調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かわぐちおついせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	川口乙遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	新津市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	渡邊朋和・高野裕子
編集機関	新津市教育委員会
所在地	〒956－0035　新潟県新津市程島2009番地　TEL　0250－24－2111
発行年月日	西暦2003年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川口乙遺跡（かわぐちおついせき）	新潟県新津市大字川口字乙555他	207	75	37度49分00秒	139度06分50秒	20010523～20010724	906	発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川口乙遺跡	遺物包蔵地	平安時代	土坑	須恵器・土師器	

川口乙遺跡発掘調査報告書

2003年3月25日発行

発行　新津市教育委員会
新潟県新津市程島2009番地
〒956－0035　TEL（0250）24－2111

印刷　㈲平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地
〒970－8024　TEL（0246）23－9051